事を免かれたりと雖ども卿が前途ハ是よりして屢〻斯る危き目に遇ふとあるべし、抑も威嚴ある紳士にこれを冒す者なく端正なる婦人ハこれに戯むるゝものなしと聞く去れば已れまず侮つて後に人これを侮ると云つて畢竟我に隙があればこそ斯樣な相談も受るならめ、嗚呼、潔ヨ潔ヨ卿が容貌は左ほどに險惡に見ゆるか、卿が言語振舞ハ左ほどに卑怯賤劣なる事に一味すべき人体を表するか、卿ハ幼なき頃より中學に入りたる時までハ純粹潔白の心を持ちたる末頼もしき少年なりき卿ハ十五年間歐洲にて德義才學を修めたる有爲の青年なりき、宗教と哲學とハ互に扶助するにハ非されども比しく是れ卿をして志操を高からしめ卿をして節義を潔からしめたるに非ずや、卿が二十餘年來學ひ得たる所ハ卿を喬木に移らしむる爲にハ非ざりしか幽谷に入らしむる爲にハ非さりしぞ、卿が日本ヨ歸りて求むる所ハ純潔の生活にハ非ざるか卿が官途に商業に意を得ずして去りしハ其故にてありけるぞ、然るを卿ハなどて斯る望外の誘導にハ罹つて卿が心を苦しむるや、卿が姓ハ清水なり清淨の水ハ卿が血統に傳へたる祖先以來の榮譽にあらずや、卿が名ハ潔なり潔白の行ひハ卿が初て此世に生れ出たる時より卿に屬したる終身の光華に非ずや、濁水に其身を沈めて穢らはしき行ひに溺るゝハ卿が姓名に愧る所にあらざるか、嗚呼、清水ヨ清水ヨ卿ハ純潔の社會に住む事を求めざるか、卿ハ何故に此の汚濁の世界に沈淪せんと欲する乎、卿ハ超然として世表に出るの勇氣なきか、卿ハ功名榮達は人爲の富貴に限るものと思惟する乎と種々無量の難問ハ想像の中より蜂起して清水が心を攻撃し是に答ふる詞なかりければ清水ハ茫然として醉へるが如き心地して其まゝ長椅子の上に倒れ臥したり

又もや戸を叩くゝ驚かされ扨ハ思ふ疲れてまどろみしかァ、我ながら浅ましやと飛び起きて入れよと命ずれば旅館の丁稚ハ郵便の手紙二

通と雑誌一册を持ち來つて清水に渡したり、雑誌ハ左まで面白からぬ品にや清水ハ表題を見たる計にて机の上に投げ出し郵便を披き見たるに一通ハ甘鯖男爵の晩餐案内狀にて一通ハ乙女孃よりの消息なり此三四日ハ相見ざる事を嘆ち扨て「昨夜とある席の集會にて噂を聞きつるに案の如く煨芋の烟ハ貴卿の評判を上げたるに打て代り昨今にてハ却て貴卿の仇となりて候ぞや生質夫人は貴卿が筆の戯にて貴族紳士たちを思罪しのみかは尊とむべき婦人がたの事まで下墨て書たるゞ怪からぬと怒からせてかの小説に云〻とあるハ貴夫人のを云〻とあるハ令孃のをなりと人〻を唆かし玉ひつれば何れも腹立ておハしけるゞや宜〻用心あらせ玉へ夢野さまも其席にて此噂を聞かれしが妾が痛く案じ煩ふを見てさな憂ひ玉ひそ僕少しく思ひ當るをの候へゞ清水君に遇て語るべし明日にも暇あらゞ僕が方へ來ませと傳へてたべとの玉ひつれば夢野さまへ急ぎ御越しあらせ玉へ又逢ひ參らする事の稀にてハいとゞ心細う覺えゆべば今日にも音づれ玉へ待ち奉る」と細〻と認めてありぬ

○第二十四回

夫ハ丁度よかつた僕も君にお目に懸り度をもあるし其に乙女さんが一座の噂を聞て痛く氣を揉み憂の色ハ蔽ふに便なき迄に見えたるゆえ左ほどお案しあるなら僕が清水君に遇つて宜い樣に相談いたさうと申し慰めて御傳言を致して置たが幸ひ今日ハ最上の日和なれば君の御樣子も承はり度し旁〻で此方へ一寸お寄り申して是から都合次

第で君の方へ参らうとも思つて居た所だ……ソウか君も是から僕かたへお出向の積で御座つたか……どふだ乙女さん團子坂の菊もそろ〳〵善からうぜ淺草の花屋敷でも本年ハエライ奮發で園中一面の大花壇を拵へたと云ふを私共と一所にお出掛なさいナお母さん(お賢を指す)お前さんもソウ毎日〻〻家にばかり引籠で繼物の檢査や張物の整理に屈托して居てハ体の毒ですぜ一所にお出なせイ……ナンノお家ハ留守番があるだらう、ソウサあの媼なら御安心だ北門の鎖鑰ハ卿に任すと留守の全權を委ねて大丈夫だナニ〳〵髪ハ夫で宜しい別にお目かしなさるにハ及ぜないよサア乙女さんお召替をお仕なさい今日ハ此の夢野が御亭主になつて御案内を申上るからと只管に勸められ去らばとて乙女母子ハ支度して清水と倶に四人一行にて午後一時ごろより駿河臺を出て根津の公園を拔け團子坂の菊を見物し淺草へ廻りぬ其途中にて夢野と乙女と話し清水とお賢と話しなどして歩行たれど夢野ハ是れ兩人の爲に面白からじと察したれば、エーお母さん大分お草臥なすつた樣だお手を引て上げやう……ナンノ〳〵是が西洋風だ御遠慮ハない總別西洋でハ女が旦那で男がお供コレ夢野や自は草臥たよチト手を引てたもと仰しやると子ー畏つて御あります此奴めが奥さまのお手を引とハ有り難い去とハ冥加に叶つた仕合とお禮を云つて臂をコンナ安排に張りサアかふお出なさいましと二の腕につかまらせて歩行が作法アレ御覽なさい清水が乙女さんの御手を頂戴してあり難さうな顔付をして居ますぜ若いものハ若い同士が結句話しも面白からうて子ーお母さんと云へばお賢ハ笑ひながら、へー年寄ハ年寄同士オヤ御免なさいましよ貴君ハまだお若いお人であつたのに頓だ失禮を申まして……ドウして〳〵男ハ年より上に見らるゝのが自慢でス既ふ先年の事であつたが私の友だちで官員をして居る漢が何でも男子ハ年寄らしく見にねば世間で信用しない

と生若いくせに無暗と年寄の眞似をしてドウしたら早く頭が禿やうかコウしたら早く白髪にならうか黒油へあるが白油の無いは不自由だと乙に年寄ぶつて居た所が或日大勢の中でフト年の話になつて貴君へお幾つだと尋ねられ、其の漢がヘー私へ厄で、御座りますと云ふと向ふの人がオヤマア四十二にいお若い事と賞めたが實へ二十五の厄年であつたと云ふを……ハア、、、、と例の夢野が滑稽にお賢へ一入興に入つたり其間に乙女と清水とへ如何なる話をなして歩行たるかお。二。人。で。お樂みと評する一言にて其情を解釋するにへ十分なるべし

時にお腹が少ゝ北山と相成つた……モウ何時だ、五時を過ぎたと……道理で胃の腑の時計が鳴て來た……と夢野の先達にてとある手輕な割烹店に入り酒なし直めしと云ふ簡約なる御注文に晩餐の宴を開きたり、夢野は一層快活を増してドウだ乙女さん紳士長者の園會や貴族高官の宴會より此方が餘ぽど面白からう是が夢野實と申す紳士の園會に引續いての盛宴ぢや、お客を前に置て入費を言ふへ失敬だが鐵道馬車人力茶代に此所の御馳走を入れて大まい金貳圓でお釣がくるぜお心置なくゆるりと召上れ、うれで而白と云ふへ御同樣に氣兼ね心配をせぬからダ、やれ一人前拾圓の西洋料理で酒を別にして三十人の客を招いた入用が都合五百圓掛つたのヤレ園會が三千圓舞踏會が貳千圓だのと莫大な奢をして世間を張りお負に呼ばれたお客は有りがた迷惑呼んだ亭主は心配辛勞、座敷の中では追從輕薄のお世辭ダラダラ其代り濟だ跡では客は亭主を惡く云ひ亭主へ客を口ぎた無く譏るが互の腹愈、其場所に居合せぬ者が貧乏閻で惡るく言はるゝが其日の景物と罷成るとへ情ない社會「ドウだ彼奴は憎い漢だどぶかして彼奴を蹶づかして遣りたい彼奴が今の分で居ては御同前に本望の妨げで御座る」などゝ御殿場で惡叔父に一味の惡侍どもが相談をする樣に休

息座敷の角でヒソ〳〵話をして居る所に運わるく其漢が來やうものなら「ヤ是は〳〵貴殿ふも今晩は此所へ御來臨で御座つたか唯今しも我等ども打寄てドウして貴殿にハお見えが無いかとお噂を申て罷在る所、イヤサ〳〵此間の御演説は天晴の御勝利敵も味方も一同に手を拍て喝采した樣は倶樂部四町四方に聞えたさうで御座る」などゝ持て來てクッ附た樣なお世辭を云ふと向ふも頗る奴で「左樣お噂下さつては赤面の仕合實は僕も只今此へ駈付て座敷を見ると多人數の群集綺羅星の如くにハ光れども其内で目ぼしき一等星が揃に揃つて見えざるは不思議マサカに一等星がみンな皆既蝕と云ふ事もあるまいにと其所あたりを探し廻りヤア〳〵徳星がたは何處ふ在ますゞと尋たるに扨は此のカートルームにお出なすつたか」と負けず劣らずお世辭のお酬馬鹿〳〵しいにも程のあるものサ、併し夫が否では浮世の交際ハ出來ぬから朱に交れバ赤うなれと少しは辛抱もせねばならぬが人間に生た不肖で御座る、僕見た樣に人間界の政治舞臺でスッテンコロリと投り出されヱヽ儘よ浮世は三分五厘世の中に色氣が有ればこう彼の連中が熱を吹くのを我慢して聞き貴卿の御無理は御尤と程よく誤託を受て居たれ其の境界を脱た上は思ふ存分に言ひ度い事を言ふが氣の藥と御覽の通りに世に背いたる畸人に爲つて居ても眞逆に息が通つてる間は矢張り大なり小なり世間の風にも吹廻されて暑サ寒サガ身に感るもの況て清水君や乙女さんは是から其の恐ろしい嫌な世間に出ねば成らぬ体樂も苦勞も是からの事だ……ナンノ少〻ぐらぬの蹟きは毫も恐るゝに足らず惡るく言はれねば又譽手も無い道理世間一ぱい誰にでも善く言はれ樣と思ふと骨ばかり折れて揚句が誰も惡く言はぬ代りに誰もまた其人を當にせず「ムー彼か彼奴はお辨茶屋の上手もの」と云はるゝが落サ「夫ナ昔も今も有る事だが漢語で言へば紳商かなで書けば山師町人が執權の衆に取り入る樣子を御覽じろ

數多い執權職の中で此のお方と星を附けて一生懸命に其人ばかりに取入て外を振向ぬ者ハいつか一度乞目が出るが滿邊なく執權職をグル〳〵廻りにする奴は望の目が出た例なし夫故に神さまは只と一人を信心して祈れ大勢の神樣を祈ると神樣同士の突掛ものになつて御利生が無いゞと云ふが彼輩の秘事だと高等商人要訣と云ふ書物に載であるゼ清水君とても其通りぢや君を譽むる人が十人あれば十人あれを毀る人が十人ありと覺悟し玉へ君が前途を妨げ樣とする敵があれを君を引立やうとする味方がある一時の毀譽は即ち立身の進路なりと覺り玉へ、乙女さんも夫を聞て喜ぶにも及ばねゞ憂ふるにも及ばぬ只とこんな評判があると清水君に知らせさえすれば宜しい夫れが實は女房の役サ……女房と云へば清水君の体が極つたらェーお母さん早く婚禮させてはどうだらう……左樣〳〵お二人が其氣なら敢て急ぐにも及びません御當人同士の心まかせが宜しい……ナンノ今更ケチな眞似をしては往かぬ矢張り是迄の通りにホテルゝ居て立派に遣べし店を縮むる機會は得意の時にあり失意の時に在らず君が資産より生ずる利息で足りずゼ資本に食込でも仕方が無い地位を社交の間に高くする元手に廻すと思へゞ資本は運轉に由て其形を變すると云ふ道理ぢや併し濫費は謹むべしだ……乙女さんの方はッウは往ぬぞ……イカニモ〳〵少しづゝ殖て來るかお殖なさるが身のお勸サアと云ふ時に清水さんお金ハ茲にありますョお遣なさいと投出すのが女房の役……イヤ餘り遲くなるッンナラお母さんは乙女さんと合乘で御歸宅か此家の出入の宿車だから途中は安心……うれぢやァ日の暮れぬ中ふと夢野は信切に世話して乙女母子を淺草より歸しサァ清水君これから僕の家に來るか……宜しひ君の旅館へ參つて尊慮を承はらう

○第二十五回

サア清水君これから眞顔ナ話に取掛らうドウダ貴君がものしたる煨芋の畑は果して禍を買ふ種に成つたらうがノ僕の豫言空しからざりしは甚以て殘念の至併し後の祭で今更愚痴を言ても詮なしと明らめ玉へ。あの煨芋の畑で貴君の才名が揚つた丈に其畑で今また貴君の身ふ世間の毀を來すと云ふは是れ當然の數敢て怪しむに足らず決して心に介し玉ふを勿れ人間萬事塞翁が馬今の毀は却て他日の譽を增す下拵えと思へは夫で濟むヨ申さは瑣細の小事なりサ……また貴君が先頃から生質と俄に心安く成つて常に往來すると聞た時にハテナ變だ大かた彼の黨派に引摺こまれたで有らうと思つて居たが暫らく立つと段〻疎遠になつて來た而已ならず貴君の事と云へば天にも地にも無い樣に譽りやして居た生質夫人が打て替た不機嫌なる素振これには必定仔細の有る事だらうと氣が附て密に探訪を下したる處ーと云ふと新聞記者の口氣めくがー生質が貴君を口説て失敗た事が曨氣に知れたるに付き扨こそと勘が附て見れば先夜夫人が無暗に貴婦人たちを煽つて貴君の事を悪ざまに振廻つたも全く其の腹愈てあつたと思はる〻斯く理が分つて見ると更に驚く程の事でも無いから放棄て置くが好いワ、實は彼等が何と金棒を引き廻さうとも左まで藥にも成らねは毒ふも成るまいが併し清水君かの生質が貴君を口説たのは貴君突然に出たる事と思ふかと問はれて清水は、左樣サ原來政治黨派に足踏をした事も無い僕を一味連判に加へ樣と云ふは突然だネ。何の突然な事があるものか貴君が拙者事以來は政治黨派に加はり一働き

仕度候間思召の御方は御相談可被下候」と廣告を出した故に生質も相談を懸た次第ぢや貴君が彼の黨に加はらぬと云ふ所は僕も御尤だと申さうが生質が相談を懸たも同じく尤だと申さねば相成らぬ。何時僕がうんな廣告を出しました頓と覺は御座らぬが。覺がなくてサ君が著述の煨芋の烟は即ち政黨に加入する內意を現はした所では御座らぬか。誠とに君がの玉ふ如く當分の內は政治上の事に志を委ねぬと云ふ存意ならナゼ政治小說を書き玉ふたか、去れば生質か是れ與すべきの人なりと思つて君を口說いたい緣由なきにあらず、又君が体よく斷はつたに付き快からず思つて君、を憎み君を攻擊するに煨芋の烟の批評を以てするも亦これ庸人には應に有るべきの事すこしも生質を怨み玉ふナ君が自から招いたる因果と明め玉へ。重々御尤の御忠告忝う存じますがシテ先生これから先は如何いたしませうかどうとも貴君の隨意に仕玉へだが僕の愚見を御尋とならば僕は君が少しも英氣を挫かず益々活潑に振舞ふが宜からうと思ふナ濡れぬ先こう露をも厭へモウ政治小說を書て世の毀譽に掛つた上は引續て政治小說でも社交小說でも著して思ふ所を述べ玉へ新聞ふ原稿を送るもよし演說に辯論を試るもよし苟も君が見識の在る所に從つて縱橫無碍に働くべし今日の政黨が氣に入らずや加入せぬ迄のを明日にも氣ふ入たる黨派が顯はれたら其中に入るとも決して妨げある可からずナンノ彼方へ遠慮したり此方へ氣兼をしたり仕ては到底自分の志は達せられぬ世間に惡く言はれ樣が歇が大勢出來やうが貴君の心に顧みて疚きを無くば引込思案をするには及ぬ物別日本人が早く老人ぶつて五十にもなると自ら爺と思つたり三十を踰すと分別盛りの積りで老成人の氣取になるのが氣に喰はぬドウして〳〵世の中の事別して政治の事は失敗の多いもので六七十の老境になつてもこれを免れずと云ふ程ちやもの我〻の年輩では猶更と思はねば成らぬ一敗に懲て進取の氣

力を失ふ樣では清水君失敬ながら大事は成せませんぜと飽まで信切に力を附けたれば清水は大に力を得て、何樣先生のお説を承はつて見ますれば不圖した戯著の一件から譽を得たり毀を來たしたり仕ますのも矢はり處世の道中と思へば決して差支は御座りません是に懲ずに益〻實地の經歷を積みませうヨ都合によつたら政黨の仲間入も致し黨派の苦刺部ふも加はつたり政治の利害に關係する紳商の下働をも仕つて見せませうが先生にも定めて御經歷の有つた事で御座らうがチト心得の爲に承り度いものです子と問ひ掛けたり。夢野は、サレバサ僕も實は往年聊か其の經歷なきにしも非ずサ勿論當時の有樣と今日とは大きに變つて居るが先づ明治二十七八年ごろの狀況を荒〻お話いたさう程にチト永いがお聞なさいイデ其頃は國會開設より漸く五六年を過たる計り諸事萬事隨分辻褄の合ぬ事も多く初の程は帝室內閣であつたが議院の勢力でトウ〳〵議院內閣に似て非なるものを組織して相互に軋轢したゆゑ政治の機關は其運動に障碍が起り詰る所ハ人民の難澁と相成つたは迷惑千萬の譯であつたヨ、そこで政治黨派は春雨の一降ごとに草の芽出しが殖る樣に何か事が有ると新黨が起り凡そ其數大小二十有餘黨なり併し其實を言へゞ何れも朋黨にて眞の政黨と云ふ程の價あるものは一ツとして無く表面ふは銘〻大層な事を云つてヤレ主義だの政略だのと誤託を吐けど其內心は何れも內閣に入らうと云ふ丈の慾心ばかり、尤も薩長聯合の藩閥勢力を維持しやうと云ふ藩閥黨と其藩閥勢力を打破つて仕舞はうと云ふ非藩閥黨と二ッがあつたが其中には薩長出身で有ながら非藩閥に加擔する人もあれゞ又他縣のもので藩閥に一味する人もあつて思ひ〳〵の見込は殊なれど詰る所は內閣御執心で自分の仲間ふ勢力を附るが目的そこで右の政黨には色〻樣〻な名稱があつて其重立たるものは第一が法主黨これは宗教の法主では無い法

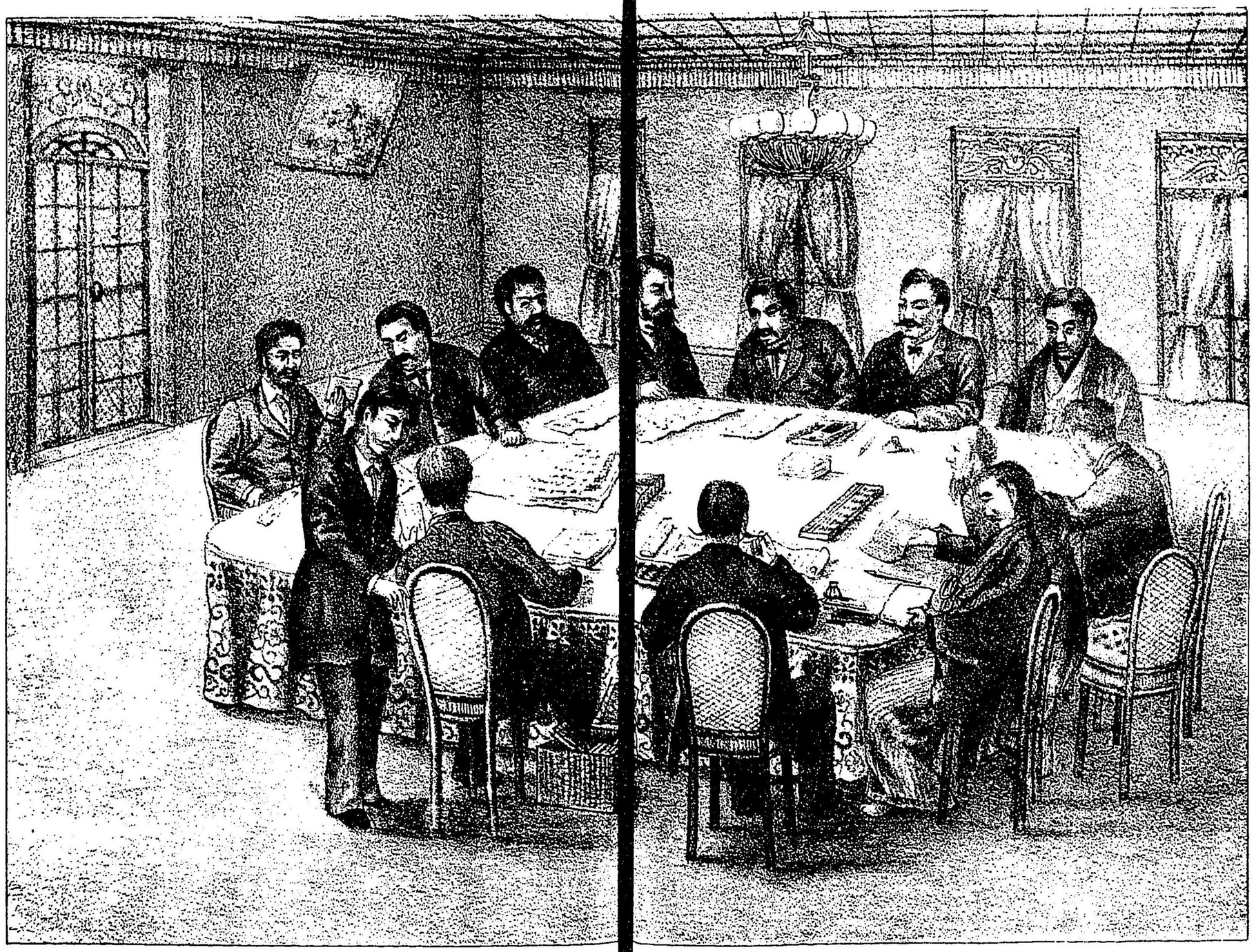
律を以て政治を行ない主權を政府に握ると云ふ主義に固まって居るは恰も眞宗の固りの如し其次が慢心黨これは政治ハ我等どもの外に知たものは無いと自惚切たる慢心ものゝ寄合、其次が死勇黨これは我黨の目的の爲には死して厭はざる勇氣を蓄えて居るドウで一度は死ぬる命ぢやとゑらひ決心の豪傑連しかしお手際は拜見しなかつた其次が至窮黨で武士は食はねど鷹揚枝花は櫻に人は武士であつたもの怪化の風にあたら花を散らしたが恨めしいと嘆いて心至に窮する人たち其次が奇智黨と申して奇妙に智惠のある官員や紳士の寄合で出沒變化の測るべからざる仲間であつた、是等を宗としてィヤ何黨何派と幟を樹て機關には何の新聞紙あり集會には何の倶樂部ありと夫はく賑かな事で向ふから此方を罵て彼奴等は人民〻〻と人民の權利を道具にして私を謀る陰險黨ぢやと云へば此方でも亦向ふを喇つて彼輩は特權を楯にし威力を賴みとなし環堵の中に籠城して一身の安を謀る環劔黨ぢやと云ひ相互に人が馬鹿でをのれが利口と誇り我等に任すれば天下太平五穀成熟商賣繁昌千鶴萬龜大入叶で御座いと天上天下唯我獨尊で吹立たる功能ハ寶丹も宜しくと云ふ位で何れも由々しかりける次第なりであつたヨ、さあ是からが內幕ばなしだが清水君一廿一ぶく遣らう

○第二十六回

夢野は話の調子に乗り更に其語を續ぎ既往の事を說き出して云く、ア

、月日は最はや失念いたしたが蓋か明治二十七年の頃であつた其時は僕もまだ英氣勃〻で可笑しく義俠の志を重じ苟も我が主義の爲め我が同志の爲とあらば假ひ火の中水の中お前と一所に暮らすなら鯨よる波虎ふす野でもーオット險難はなしが傍路にうれるー鳥有は敢て之を辭せずと云ふ勢ひで常時誘唆の刻出に乘つてお先に遣はれたが頗轉氣もの平日心安い同士が寄合て話の會所に仕たる楊柳舘と云ふが酷い流行で凡そ官員紳士豪商學者の中でも智惠があつて如才なくつて學問があつて氣力の無い才子連中は大抵これに加入またり此會員の性質が餘りドツト仕らぬから僕も其初は巧く避てドウしてく、夢、野、ご、き、貧、乏、人、は、迚、も、ア、ノ、立、派、な、中、には、入、れ、ま、せ、んと、斷つて居たが、イヤ、く、夢、野、先、生、は、當、代、の、議、論、家、政、治、經、濟、外、交、歴、史、いつれも、究め、ざる、所、なく、博、學、多、識で、名、望、世、に、偏ねく、殊、に、文、章、演、説、に、於、ては、先、生、に、肩を、並ぶる、人、なしとは、天下の、公、評、か、る、人、物が、加、入、なくては、當苦刺部の光を失ふ道理我〻も俱に面伏の心地いたせば是非とも御入會下されい特別名譽會員に崇め奉り入會金などは更に申受けぬ若し臨時に先生を煩はす樣な事が有る時には聊かながら慰勞も差出すで御座らう必ず〳〵御心置なく御加入をとひたすらに勸められた所から鳥有先生忽ち自惚先生となり左程までの儀ならば諸君の厚意を無にするも本意にあらず委細承知仕ると分際をも顧りみず右の楊柳苦刺部の會員とは相成つたり扨また其頃慢心黨は瓶子倶樂部是は鹿谷の集會に法どつて名附たるもの歟死勇黨は突飛館是は突然と飛び出す故の名目歟)と思ひ〳〵に集會所を定めて寄〻の相談に各〻議院に勝を取る評議をかり凡う會と名の附くもので多少政黨の臭を含まざるもの無く鎭守の祭禮に高天原に神止まりましたる鈴の音は神權主義の演説を初むる知らせとなり旦那寺の法會に諸行無常と響きたる鐘の聲は敎一致の目的を固むる合圖となり製造所を持てる輩は其品を

澤山に賣らんが爲に保護稅論の金主となり舶來物の問屋組合は輸入品を安直に仕入れんが爲に自由貿易說の尻押となり、森羅萬象みな政治と私利との道行狂言公平の眼を以て是を見れば恰も百鬼夜行の圖を見るが如くなりき斯る中ふ楊柳館のみが未だ政黨の風に罹らざるを不審なると怪みたるに暴雨山を拔き大風林を仆すに當つて楊柳豈に獨り其禍を免るゝの理あらんや創立より未た一年ならざるに早くも政黨の來襲に出遇ふたり。或日の事なりしが僕は夕方より例の如く社務を畢つて楊柳館に出掛け夜食を喫たるに平日に變つたる少人數。ハテナ入口の帽子掛には見覺のある安帽子が大分あるのに其人が食堂に顏を出さぬは不思議と心に怪しみながら食事を仕舞ひ夫から讀書室を見ても閒として人なし其所あたりを步行たるに奧まりたる座敷ふ別室を設け二十人ばかりが內證咄し其內の一人が用達にとて戶を出る圖端に量らずも列座の人と僕と顏を見合せたり、太かた是は



金儲の相談であらう坊しては好しからずと僕は急ぎ足で廊下の向ふへ駈け抜やうとすると其一人が「オイ〳〵夢野君丁度よかつたマア〳〵此所へ入り玉へ實は君にも御相談しやうと思つて只今しも君を捜した所であつた(嘘べつかり)先〳〵席に附き玉へ」と言はれて見ると避すも工合が悪けれど詮方なく僕も其座に列なつたり、斯て一座の顔振を拜見したるに平日會合する連中ながら金儲の相談にしては毛並の違つた輩も其中に交つたり又流行の政治論かと思へば政治などの議論は七里決慶と云ふ拜金宗の先達連中も居るし何の談合やら更らに分らず、尤も二十人たらずの人〻は何れも苦虫を食つた樣な顔をして居る中に取分けて首席に並びたる四五人が辛苦を嘗たる閻魔の如く苦り切つたる有樣は唯事ならずと見えたりける。此時りの閻魔の一人が僕に向て「時に夢野君只今僕等が鄙見を提出して各位の賢慮を仰ぎ決心を望まんと存じて口を開た計りの所で御座る」と斷つて閻魔等は交々

一同に對して更に其語を述べて云く……只今も申たる如く御同樣に我國で屈指の紳士と言はれて居る身分これ迄の所は其の紳士も政治黨派の事に關係せずとも濟だらうが是からは左樣まねるまいぜ平日銚子の濱では鰯が取れる柳の下には泥鰌が居ると思ふと目的が違ばう、夫も御同樣が木地の紳士で內閣がドウならうが政略がドウ變らうがナーニおれはおれの財產で立派に立て行くと云ふ樣なら宜しいが實はと云へば御同樣に危い橋も時に由つては渡つて步行かねば甘ひ儲の出來ぬ体政府の息が掛つて居ればこう人の及ぶぬ所に手が屆いて安い金も遣へるらい儲もして居るが明日にも其緣が切れて御覽じろ木から落た猿も同前、斯く申せど失敬の至ながら御同樣の身代は猶ほ氷の上に建たる家屋の如し若し其氷が融て仕舞たらドウなさる、成ほど諸君の中ふは其用意にと今日は某矣に御權威があるから御機嫌を取つては居れど明日は某伯に代るも知れねば豫め其覺悟で彼方へも緣を繫で置き夫で安心だと思召さうが向ふにも前口のお出入があれば〻モウ八宗兼學では往ますまい……勿論我々が官員や議員に成り度いでは無し政治家と云ふ評判を取り度いでは無し實を申せば政黨などゝ云ふ事は虫か好かねど背に腹は替られまい、ナンでも我々が賴とする本尊さまを今の中に拵らへて其本尊さまが永く權威を政治の上に占める樣にして御同樣の利益を保護させ甘ひ金儲は外へ遣らぬ事に仕てもらはねば安心が附くまい……あるとも〻僕等(即ち閻魔等)が考へではソレあの金平子爵子凡そ智惠があつて話が早く分つて相談が直に出來る政治家はアノ上には無からうぜ依てアノ金平公を浮動明王と崇め輕石君は顏が怖いから鬼蛇童子長竿君はノッポウだから背高童子となり我々一同は其明王の十六童子になり夫から三十番神を募り百轉黨を立て樣では無いか……そこで舌長や百舌口などを引摺り込で演說をさせ……新聞紙は記者を買込みさへすれゞドウ

でも成るし(ヒドク見くびつたナ)何でも此方の都合の宜い事を矢たらに饒舌らせたり書かせたりして輿論を煽り立つれは世間がワッと云ふは必定……サウとも〳〵議員には我々の言ふ事を聞く奴を選擧せねば妙が無いナンノ六ケしい事が有るものか金さへ出せば投票は幾何でも買るソコは氣を揉まずとも宜しい……ナニ主義をドウするとエ夢野君野暮を云つては困るぜ別に主義も糸瓜も入るものか何事に限らず我々の利益を保護するのが大主義サそれ故に我々も其保護の爲には議員選擧新聞演説集會相談の入費は積金の中から出して遣る是が即ち我等の利益の保險料だから惜いけれとも仕方が無い……金平が他日説を變へたらドウするとは貴君のに尋とも覺え申さぬ金平が變説して我黨の不利益と相成る時は未練會釋なく直に金平を追出して更に外の浮動明王を立る丈の事なんの〳〵明王には喜で成る政治家が何人もあるヨ……此方が金平の黨になると思ふと主客が違ふぜ先づ我々が百轉黨を結で差向き金平を首領にする我黨の爲ふ働かするのだ即ち我々の指揮の下に立たしむるのだ夫だから我々が主權者で金平は主權者の意に從ふ被雇ちやもの若し意に背くに於ては之を廢して他に相當の人物を求め交代せしむるは至當の譯合では御座らぬか……と段々に相談が運び其手續はドウする醵金はコウすると纏まり楊柳館は百轉黨の集會とは相成つたり

清水は之を聞て、へー夫から金平子爵はドウ仕ましたと問たるに夢野は、サレばさ金平も頗る才子だから籠絡された振をして一旦は百轉黨の首領になつたが勢力を得たら忽に反覆して慢心黨と一ッになつたヨ。シテ其百轉黨はドウ仕ました。百轉黨が利欲の爭いから内輪分が出來て程なく解散。りの楊柳館は名前に由緣があるからと云ふので今の燕子會で其家屋を買取り集會い立消となつた。シテ〳〵先生は其時……

……。僕が僕はアノ子口が惡いから邪魔になるつて直に其仲間を追出

○第二十七回

斯て其後清水は東京商法會議所の顧問に聘せられたり此の商法會議所と云ふは歐米のチャンバー、オフ、コムマルスの制に倣ひ明治二十五六年の頃より商業の要地に於て重立たる商人等が集まつて組織せる設立なり、中にも東京の會議所は其往の商法會議所より引續きて商工會と代り遂に此會議所と成たれば來歴は古し殊に首府たる東京の大商人の寄合所なれば中々の勢力ありとは知られたり、此會議所には時々内務大藏農商務の諸省または議院よりも諮問の事ども有れば平日は其取調向かつハ書面など起草する等の要務を掌どらしめ内實は奥の院の先生にして置き智惠を借るべき人物を得たきものなりと會議所の正副會長幹事委員評議の上にて清水潔こう顧問には適當の人物なれとあつて乃ち清水を東京商人會議所の書記長に聘し一ヶ月貳百圓の手當を贈る事に定まり夫で毎日の出勤と云ふにも非ざれば清水は思ひ掛なき鳳凰池を得て當分の満足を極めたり尤も會議所に於ては紳商たちが筋道の立たぬ議論を得意に辨ずるを聽問したり左まで要用もなき統計を製つたり譯の分らぬ諮問の答議を草案したりする丈にて別に是と云つて骨の折るゝ事業も無ければ清水は樂隱居同前にて二十年前の元老院とても斯く迄には非ざるべしと羨まぬものは無かりけり。然るに清水が難儀と云ふは此の會議所の顔利連中が首唱にて取建たる名聞會と申す寄合あり清水は其會の世話人となりしが

表面は体裁を飾り綺羅を張たる紳商の寄合なれど頗る派手を盡せども素性を問へば二一天作で叩き上げた商人たけに其細かい事は言語の及ぶ所にあらずと時〻嫌氣になつて堪られぬ事の多けれど清水は爰が辛抱の仕所なりと堪へ忍びたるが其上の大役と云ふは紳商たちが數人申合せ又は一人にて權威の司人を招きて饗應する度ごとにお手傳やらお相手に召出さるゝ臨時の課役是には清水もほど〳〵困却はてゝモウ御免を蒙り度いと思ふ事の多かりしとゞヤー清水先生、君を累はすハ甚だお氣の毒だが實は來る十五日は藍植侯柿括伯を私が千住の別莊にお招き申す積り赤沙汰侯濱矢良伯町替博士百舌山學士へも同じく案内を送り凡そ人數は亭主がたとも二十五人ばかり料理ハ洋食も氣が詰るから八百善に申付て矢張り例の通りの日本料理酌人や藝人も都て手配を命じて置き招待狀も夫々に出したが先生にもドウゾ其日ハお出で下さいナ時刻ハお客がたへハ午後三時よりと申して置たれど先生ハ一時から來て座敷の飾付や何か萬端行屆かぬ所を差圖して下さいヨ誠に御苦勞だけれど……と依頼と命令とを兼たる案内、イヤとも云ハれねゞ委細承知仕ると請合ひ當日になれば清水は黒魚子の羽織仙臺平の袴と云ふ拵へにて彼の千住なる皺井長者の別莊に赴き亭主の手傳お取持の役を勤めたり。案内の刻限にもなれば貴顯は各〻馬車の輪を輾らせて御來臨、コレハ〳〵御前樣にハ御用多の處を御光臨なし下し置れ有り難い仕合誠に以て一身の光榮此上も無い儀に御座りまするとと低頭平身して挨拶すれば彼方ハ横柄な顔にて、イヤ皺井今日ハ忝なう實ハ毎日〻〻方〻に呼るゝので草臥て責てハ一日休息したいと思つて居る處であつたが折角お手前の御案内ぢやから參つたと恩に掛たるお答へハ成程これ位で無つてハ見識が見えまいと思ひ清水も俱に驚入つて平伏したり。追々にお客ハ御入來とゝふ一群彼所に一むれ、オイ皺井アノ燈籠ハ大層お

もしろいナ……ムーあれが奥州の石かナ……イヤ〳〵貰つてハ困る代料ハ拂はうから二ッばかり注文して遣つて呉い……僕も一剳たのもう僕ハ雪見形の大きいのが好ぢや。ヘィ〳〵お安い御用で御座います早速支店へ申遣しませう……ナンノ廉價ものでも御座います……代價ハ其節御執事まで申上ませうと直段も極らぬ注文を直に引受てニコ〳〵して皺井が喜びたるハ蓋し不可思議の計算あるべし。ドウカ〳〵一番打たうか……馬鹿な事を云ふナ貴樣ハ此間差酢世ふ二目おかせて三番續けて負たと云ふで無いか……そんなら互先サ……オット俟よィヤ〳〵其石ばかりでハ宜ん其石と此石とをカウ取て此所から打直さいでハ余の方の都合が悪い……ナンノ其ナに五手も六手も俟せるぢや無いワ此堰になる所を俟せるから據なく跡戻りする譯ダと至極都合の宜御意。ヘィ〳〵御尤で御座るとお相手に罷出たる碁打の黒石は兼〻皺井より申付られたる内意もあれ

は此所を先途と考へドウしても此碁ハ負ねば成ぬが斯う見物の多い所で何としたら岡目に見えぬ樣に負る事が出來やうか……ア、用でも無い赤沙汰俟の助言うれでハ此石が活て勘定が違つて來るが助言を聞かぬ譯にも往かず困つたものだと深く心を苦しめ一生懸命に負る工夫に他事なき有樣は人こう知らね其身ふ取てハ秀和と晴の碁を打たる時よりも心配なるべし、然るに氣の毒なるかな黒石が苦心も赤沙汰が助言の爲に水の泡となり作つて見れば先樣が七目のお負と成つたる哀しさよ、サア今一番打たんと藍植は少しく逆鱗の御色を顯はし玉へば黒石ハヘィ〳〵有り難う御座りますィヤ只今の碁は全く御前樣が麹町の御前とお咄を遊ばした中にフト隅の所をお見落なさいましたが僕の仕合と相成ましたドウして〳〵御前樣にハ是位こすく廻りませねば勝ませんからと頻に取繕へども勝たる證據は消かねたる折柄黒石さん〳〵と呼を汝に一寸御免をと一禮して退き次の間

に出て見れば、皺井ハ眉に八の字を寄せて、貴公ハドウも宜んぜ今日のお正客は藍植矣ぢや無いか夫にナセ勝た怪からぬ事だ……ナニ先様が餘りお下手過るからッて、そりや知れた事だ下手の番附でハ東京で何人と云ふ幕の内ぢやもの勝てよけりや誰でも勝つ貴公を頼みやせんせ畢竟白人でハドウしてもあの御方にハ負る事が出來ぬから黒人の貴公を態〻頼んだのぢやないかホンニ〳〵頼み甲斐の無い男だ今度の一番ハキット大負に負さつしやい其次も又よい位に負ろ若し勝でも仕やうものなら以來貴公を余が宅に出入させぬゾ抵當に取た貴公の宅も遂に期限が來て居るから取上て仕舞うゾと以ての外に叱り附られ、ヘイ〳〵恐入ました今度ハ御相手をして屹度二番が三番でも續け様に負て先様の御機嫌を取結びます程に御安心下さいましと立派ふ請合ひ再び、座敷に出で今一局お相手を願ひ奉ると一禮して碁盤に向ひ打ち初めたるに藍植矣の出來ハ更に前局よりも悪けれど黒石ハコハ大變なり如何して負くる工夫の附べきゞ傳聞く那須與一ハ神明を祈つて扇の的を射たりとかや苦い時の神頼みいざや我も祈つて見んと考る振にて眼を閉ぢ、南無八幡大菩薩日本の神明別してハ碁道の元祖吉備公の大權現願くハ今度の碁ふ負を取せて賜び玉へ此碁うち損ずるほどならば碁盤切破り欠落して人に再び面をば向ハん可からず今一度此内に出入させんと思召さば此碁を勝たせ玉ふなと心の中に祈念して眼を見開いて見たりければ嗣落ひとつあつて此碁も負よげに見えたりけり

○第二十八回

清水ハ今かの皺井長者が黒石を叱つたる小言を聞き黒石が必死の苦みを見物して可笑しくも亦氣の毒にてありしが此分でハ今日の宴會ふハマダ〳〵面白い事の多かるべし能く氣を附て社交學の實地研究を仕らんものをと左あらぬ体にて座敷の中を周旋したり椽側の處に三四人團ひ集たる一群の首座ハ柿括伯なるが心あり氣に鼻の下の泥鰌髯を捻り廻して……ハア先生あの詩をお見やつたかノ！……新潟で見たとソーカ、ナニ彼の詩ハ頗る拙作サ道中で人力の上の居眠の中にフト浮だ趣向を其儘作つた許りで更に推敲を下さねば太だ精練に欠く所があると謙遜の中に自づから得意の語氣あるを見て取りお相手に罷出たる粹金志後粹金として年の頃ハ六十に近き文人仲間の俗物少さばかり文事が有るので上流の幇間を内職となし時によつてハ歌澤の一くさりも唄ハうと云ふ由斷のならぬ人物)頭を押へて、へーエ拠ハ御道中の御即吟であらせられましたかィヤ實に恐入ました枕山湖山の先輩に彼の御名吟を拜見させませぬハ遺憾千萬、アヽ何とかで御座いましたツィ忘却しまーしたがエーと左様〻〻擔頭猶嫌江南物不挿梅花一兩枝とハ誠に以て清廉の御氣象おのづから句上に顯れ伯顔もナルホド余が及ばざる所なりと赤面して三舍を避るで御座りませう夫から寄語謝安石現時奈蒼生の御句などハ所謂る龍蛇の勢ひあつて迚も尋常の者に出來る所でハ御座いません此の粹金などは殆ど我を打つて恐縮する計りの次第と褒め掛れば柿括ハ得意になつて、ナンノ褒られてハ面目ないアンナ作ばかりでも無い偶〻一二首ハ貴公たちに見せらるゝ詩もあるが近日余の詩稿を見やうか。ソレハ〳〵有り難い仕合迚もの事に病中に拜見が致したう御座りますネ陳腐さへ猶風を愈したりと申せば況てや閣下の御名吟ろれを一讀し樣ものなら忽に此の粹金が呻吟の音ハ誦詠の聲と代り病氣平愈して精神舊に

復するハ夫れ諸を掌に睹が如しと存じますれば是非とも拜見仰せ付られ度い、ナンナラ兩三日中に尊稿拜見かた〳〵高堂ふ伺候仕りませう。ソウサ近日お來やれ見せて遣らう併し余か詩ハ一氣呵成だから時としてハ平仄が間違つたり失韵したりするので詩人の批判を蒙るに困るヨ。夫ハ失敬ながら批評する奴が未だ貴顯將相ふして天下の重を以て自から任ずる御方さまの地位を知らぬから起る事で些小も批評にハ相成ませぬ、ドウして〳〵台鼎の相公にして豈一〻に平仄を調べたり韵字を問ふたりする御暇が有りませうや、原來平仄と申ものも沉約が定めたるに起り今日の四聲でもハ座らず韵の通轉ハ今古相同じからず況や東洋の日本に在て支那の詩調を作るので御座るもの失韵錯聲ハ決して詩の瑕に非ず古人の名作にも澤山失韵錯聲があれど其名作たるに於てハ毫も差支ハぬ座りません閣下の御地位でハ悠に格式に御拘泥あつて斧鑿の痕を殘し至ふてハ却て御見識が卑く成ります失韵があらうが錯聲があらうがお構なく尊意の在る所をばお作り遊ばさる方が天眞爛熳で絶妙で御座います既に愚作に英雄何必論平仄直將血腸作好詩と申す句を吐ましたが即ち閣下の御作に符合して居りますテ。ナル程是ハ卓論だ貴公の詩を評するハ尋常詩人の比に非ず面白いィヤ一体詩人と云ふ奴ハ我〻が地位を知らぬから得て彼等の規矩を以て強て當てはめ樣とする弊があるてノー。夫が詩人の通弊で困りまするドウ仕つりまして閣下の御作などハ已れ先づ心を其の境界に置て靜に觀念いたしませねを妙味が分るべき筈のものでハ御座いませず。貴公ハ與に詩を語るべし近日必らず來さつせいヨと平常ハ五分の抜目も無い柿括伯も其拙吟を譽られた所から粹金に乘せられてゐらい隙を見せたりけり

床の間に寄つたる一群は其日の上客たる藍植矣が今しも二番つゞけて黒石ふ打勝て大いに御機嫌が直りドウだ皺井いまの勝負を見たか

流石の黒石も最初の勢ひどこへやらで散々の敗北サ功を桑楡に收むるとは此事だて全体黒石が今日ハ先づ是でと勝負なしの所で局を歛むれば宜いのに商賣人が素人に負ては殘念だと云ふ氣込で今一番願つて是非とも勝負を附ませうと迫込で來たから余にひどい目に遇つたのサ……ハー額か書て遣らう墨ハ摺てあるかとの玉へな皺丼ハ、ヘィ〳〵疾に用意が仕て御座ります是まで貴矣樣の御筆を戴きませんから今日ハ恐ながら願ひませうと存じて居ましたオィ〳〵清水君お紙やお筆ハ持て來てあるナ。都て是へ持參して御座います。ヤー清水君ハ中々名筆だドゥだ書んか……余ハ字ハ餘り上手で無いがマア書て見やうと毛氈の上に紙を引張り置かせ筆を採つて硯の中にザブと漬し……エー清水何を書かうかナ……何でも宜いとソンナラ皺井の爲ふなる語を書て遣らうと往なりふ筆をブッ附け力を入れてぐつと引き、ヤー何だか赤いものが出たぜ、ハー紙が筆で破れて下の毛氈が面を出した、是やいかん外の紙に書かう。イヤ〳〵結構で御座います御筆力の勁健なる所が紙背に透て妙で御座いますと清水ハ可笑を悚へて冷評を云へば藍植ハ却て得意になり、ホンに左樣だ力が餘つてハ紙でも絹でも破れる事があると云ひながら鐵釘の折と蚯蚓の委頓とを合併した樣なる大字を五字並べて書き傍に落款をして筆を置き鼻を蠕動かし、エー清水どふだ好からふ時間是賣金明治三十七年書爲皺井翁虛心陳人ムー好からうがメィム、イス、モニー時ハ黄金であるぢやの四大文字の額うれから興に乘じて懸物ハ続が宜い唐紙ハ厚いが宜いと熱を吹きやがて横物三枚竪物五枚ほど書て、アー草臥たモウよろう。有り難う御座います早速仕立ますると御座りませうと禮を述ぶる。先づ夫を擴げて見ろとの御意に任せ座敷のなげしふ假張りをして見せると相客も亭主がたも、ムー斯して拜見すると別段に結構で御座る

次が燒肴と次第〻に配膳し亭主の挨拶にて盃を勸め其日の司令長官を承へつたる老婆藝者のお欲が差圖に藝者へ賓客の前に撒兵を布きたる賓客へ各〻笑を含み玉ひ、ヤー小喏ワイは昨夜アイからドシタ……、コレ〳〵おころ隱すな〳〵おぬしが此間合乘で橋場に往た事を知てるゾ、ナンノ余がコソナ事をするものか彼や横濱の女將軍が邪推で云ひ出した噂でなしヨ……イーエ御前いけませんよお早ちやんがお生姉さんと一所に二番船の濱車で新橋から鎌倉へ往て三日ばかり泊て歸つた事を知つて居ますよ……アラマー相公へ罪が深いヨウれでも彼子が頬ぺたの髭が好ヨーと惚けたから仕方がありませんのヨ……馬鹿ア言ふナうりや人違ひだお隣の事ぢやらう……嘘だぜ赤吉〳〵白狀しろハヽヽアと方〻にて高笑へ實にも愉快げにぞ見えたりける

時刻へ宜しと皺井が差圖に三の間の唐紙をサッと左右に開けば盲法師三人の三曲うの側に一人の坊主が尺八を以て扣へ見えぬながらも賓客の方へ向ひ低頭して夫より合奏に掛つたるへ是れ當時東京にて名手と知られたる其道の達人ぞろひ、こゝぞと各〻秘曲を盡したれば座敷の内も澄み渡り梁の塵も動くべき筈なれど、ソコが賓客へ名だゝる聲的中〻さう甘くへ參らず……コリヤ豆子アノ盲へ誰だ、ナニ彼が山脇に山曾か、アノ穢い盲が坂の島か、フー尺八を吹てるが甫童だと、ヘー彼が上手かノー……ヤー、チヤカノ〳〵キユー〳〵遣チヨルノ、何だか更ぱり分らぬにへ困るヨ……何と云ふ唄だ、アレが東獅子か子ッカラ獅子が荒れ廻る樣ナ所へ無い子、手事だか足事だか知らぬが面白う無い早く止れを宜に……と左しも名人達人の秘曲も受けぬ所でへ受けぬものと見えて追〻に火の手が強くなりコリヤ〳〵碁盤を持て來い先刻の勝負を附やうと云ふもあれば高聲にて藝者に戯謔もあつて三曲の妙を聽て感ずるものへ老妓一人の外へ無かりけり

實に能く出來た。エー皺井君この中を一枚僕に讓らぬかと取らうとすれば、どうして〳〵夫ハ御免を蒙りますませうが是はいけませんと障ゆるハ原より所望するも斷るも俱に是れ世辭の暗答、さうとハ知らず藍植ハ、コレ〳〵爭ひ玉ふナ又序に書て遣るワとの一言で忽ちに爭の止つたるハヨイ工合なり。町替博士ハ清水に向ひ、貴君ハ何と拜見し玉ふかヒスエキセルレンシーの御書体ハ絶妙ぢやが何から轉化し來たらうかナと問ふに清水ハ此奴おれを困らせに尋ぬるナと覺つたれば、サレバサ斯る大人君子の書は都て自からハ一機軸を出さるゝゆゑ其の出處を論ずるものでハ無いが愚見でハ筆鋒の峻嚴にして橫斜なる處ハ遠くて黃山谷近くて鄭板橋また運筆の圓轉にして放逸なる所ハ遠くて懷素近くて祝枝山で御座りませう(小さな聲で寶丹の書た看板と綾岡の書た板下を擣まぜた樣だ)と云ふを聞て向ふの方で藍植は、ヤー清水敬服〳〵君ハ中〳〵書に明いノー

○第二十九回

時刻もはや黃昏に近づきけれゝ皺井長者が座敷の廣間より次の間入側に至るまで殘る隈なくランプ燭臺を點し賓客の座を設けィザト招し夫〳〵に着座あるを合圖ふて藝者十五六人いづれも白襟紋付の大禮服にてドヤ〳〵と遙の末座に罷出で賓客に向ひ一禮して退きたり其中にてクス〳〵笑ひながら袖引合て私語たるハ思ふに賓客の內に知已の方があつての事なるべし。引返して銘〳〵にお膳を持出し賓客の前に据ゑ參らせ程よき所に銀の盃洗を置き第一が口取其次が刺身うの

次が燒肴と次第〻に配膳し亭主の挨拶にて盃を勸め其日の司令長官を承へつたる老婆藝者のお欲が差圖に藝者へ賓客の前に撒兵をゞ布きたる、賓客へ各〻笑を含み玉ひ、ヤー小喏ワイは昨夜アイからドシタ……、コレ〳〵おころ隱すな〳〵おぬしが此間合乘で橋場に往た事を知てるゾ、ナンノ余がコソナ事をするものか彼や横濱の女將軍が邪推で云ひ出した噂なしヨ……イーヱ御前いけませんよお早ちやんがお生姉さんと一所に二番船の濠車で新橋から鎌倉へ往て三日ばかり泊て歸つた事を知つて居ますよ……アラマー相公へ罪が深いヨウれでも彼子が頬ぺたの髭が好ヽヨーと惚けたから仕方がありませんのヨ……馬鹿ァ言ふナろりや人違ひだお隣の事ぢやらう……嘘だぜ赤吉〳〵白狀しろハヽヽァと方〻にて高笑へ實にも愉快げにぞ見えたりける

時刻へ宜しと皺井が差圖に三の間の唐紙をサッと左右に開けば盲法師三人の三曲うの側に一人の坊主が尺八を以て扣へ見えぬながらも賓客の方へ向ひ低頭して夫より合奏に掛つたるへ是れ當時東京にて名手と知られたる其道の達人ゞろひ、こゝぞと各〻秘曲を盡したれば座敷の内も澄み渡り梁の塵も動くべき筈なれど、ソコが賓客へ名だゝる聾的中〻さう甘くへ參らず……コリヤ豆子アノ盲へ誰だナニ彼が山脇に山曾か、アノ穢い盲が坂の島か、フー尺八を吹てるが甫童だと、へー彼が上手かノー……ヤー、チヤカノ〳〵キューー〳〵遣チョルノ何だか更ばり分らぬにへ困るヨ……何と云ふ唄だ、アレが東獅子か子ッカラ獅子が荒れ廻る樣ナ所へ無い子、手事だか足事だか知らぬが面白う無い早く止れゞ宜に……と左しも名人達人の秘曲も受けぬ所でへ受けぬものと見えて追〻に火の手が強くなりコリヤ〳〵碁盤を持て來い先刻の勝負を附やうと云ふもあれば高聲にて藝者に戯謔もあつて三曲の妙を聽て感ずるものへ老妓一人の外へ無かりけり

差替つて顕はれ出たるハ清元お京の獨吟、三味線ハ梅七、俊三の上調子、誰が好みにや淺間を序から詰れとの注文に年こう取つたれお京の美音、見臺に向つて鼻涕をチンとかみあハれ古べを思ひ出づれなつかしやと語り出したり、コリヤ老婆でも女ぢや少しハ面白からうと顔を見詰めたる人もあり又謠ひ掛りの妙なるに驚かされて是れからどんな聲を出すかと耳を引立たる人もあつて暫しハ靜なりけるが爭でか永く續くべき香のかほりにひかれ來る頃よりソロ〳〵座敷ハガヤガヤとなり初め奥州が立姿の顯れ出ぬ中ふハヤ原の如く再び騷がしく成り……アノ老婆の清元ハサッパリ面白くないぜ先ど富貴樓で猿吉が語つたが、ソレ東方朔、ッウ〳〵三千歳〳〵、其の三千歳の方が餘程意氣な樣だつたッレナ一日逢ハねば千日の思にわたしや煩うて針や藥のしるしさへ泣の泪に紙ぬらしと云ふ所ハ宜て堪らなかつたぜ……一体アリヤどふした譯だサッパリ理窟が分らんぢや無いか畑くらべ

ん淺間山と云つたりうなたハ奥州ぢや無いかと云つたから磐梯山の噴火騷動かと思つて居たに面白くも無い幽靈の愚癡話かと小言だら〳〵、此方ハ此を晴と眞劍に語る彼方ハ難義の不平の沙汰おろの鏡の影をだに見ぬ目に曇る薄月夜からねやの障子に面影もれての上甲の所に成てヤット賓客の一人より初めてお譽の聲を賜はつたるハ當日の一等賞なるべし、其間に最初ハ小聲にて南子を攫み夫から藤八になり……相公左の指で鼻糞を堀ながら右の手で拳とは不性ちやありませんか、ナンノお欲貴さまの樣ナ婆的にハ片手で澤山だなどゝ追々に聲が大きくなり淺間が嶽も淺間しや座敷も漸く崩れ掛つたればコハ堪らじとや思ひけんさしものお京も怺へかねハる枕の數々に一足飛をなしさんゴの川も劔の山も大急に駈拔けてまぼろしの姿ハ消てかげろうの如くに樂屋へぞ入にける

茲に皺井が斯る嫠應の時にハ參謀と頼みたる摺辛四郎ハ最前より座

敷を周旋しながら賓客の様子に氣を附けたるに三千歳の口説の新内掛がお氣に入つたり鶴賀若秀を擧させ玉へる噂のチラリと耳に入つたれを密にかくと皺井に知らせ云々し玉へと勸めたるに皺井は直に參謀の策略を用ひ急ぎ二人引跡押附の車に使を乘せて吉原に遣し三味線と語り本を持參にて直樣參るべしとお沙羅が許へ申入れたり恰も好しお沙羅は其日お茶らを挽て在ければ大急にて支度して其車に飛乘り駈附たるに淺間の切れぬ中にはや長者が別莊の樂屋へ參着したり。長者へ賓客の御前に出で永々と面白くもなき淨瑠理にお耳を穢し恐入りまして御座りましたお口直しィヤお耳直しに新内を一段語らせたう存じますが如何と伺ふたるに參謀が策略果して其圖に當り上座の賓客は大得意にて、ハア新内か夫へ一段と面白からうドウモナ盲の琴や婆の唄は乃公等にハ分らんから實は退屈ぢやが新内は宜いナ、だれか語る藝者が語ると、ハーコリヤ聞ものぢや早う〳〵との御意に皺井へ大に喜びお沙羅をば恭しく毛氈の上に据ゑィザ一曲とは所望したり。向ふの座よりコリヤ〳〵何を語るナ注文があるゾ明烏を語つて聞かせて呉い、イヤ〳〵夫よりや乃公へ尾上伊太八が好ぢやとの御託宣に……左樣なら明烏の次に伊太八と致しませうと三味線の調子を合せ語り掛つたるに左ばかり廣き廣座敷も肅として聲なく先の手事や清元に引替て賓客はみな耳を澄し感に入てゞ聞玉ふ……どうした緣でかの人に逢ふた初手からかわいさが身に染〻とほれぬいて堪へ性なきなつかしさィヤ中〻忍らい乃公も堪らぬゾうなたも共にと云ひたいがいとしうなたを手を掛けてどふ成るものゞながらへてャア時次郎へ人情があるのゥ乃公が辭表を出すから貴樣も出して仕舞へとへ云へぬナハ、、、、かねて二人が取替す起請誓詞へみんな仇どふで死なんす覺悟なら三途の川も是れ此のやうにハテナ扨へ兼て聯帶責任の契約があるナきのふの花へけふの夢今へ我身につま

されて義理と云ふ字ハ是非もなや勸する身の儘ならずヤァ遣チョルナそりや道理ちや無いかずいた男にやわしや命でも何の惜しかろ露の身の消ぼ恨もなきものをィャこりや堪らぬ小喏どふだ乃公にもアヽ言ハんかと傍に待りたる藝妓ふだき附く眞似を仕玉へをアレ御前およし遊ばせ皆さんが覽て入つしやいますヨと顔に紅葉を上たるハ是れ果して何故にや知らまほしゝ……サァ此後が乃公の好の伊太八ぢやコリャお沙羅一杯のんで直に語つて呉い貴樣の顔色ハ敢て美人と云ふでハ無いが明烏を語つて居た中ハ貴樣が浦里の樣に見えたず途初てより一日も烏のなかぬ日ハあれどお顔見ぬ日ハないわいなと意氣な節で語るのを早く聞たいナ今度は貴樣がきつと尾上の樣な美人に見ゆるゾ……我が假名筆の命毛ですみ永らへる其日過男の身でさへ言ひ憎いにかうした勸の其中で物日節句も相應に……ヨー〳〵日本一ぢや實に我が日本國の音曲に斯る幽妙なる所があるを外國人が知らぬハ仕方が無いが帝國音樂會で是を捨て置くハ殘念ぢや不平ぢやと滿座の喝采にお沙羅ハ面目を施し意氣揚〻と其曲を終り賓客ハ皆大に興じ玉ひき

○第三十回

斯くて清水ハ商人會議所の顧問となり隨分氣障な中をも辛抱したる甲斐あつて幾程もなく東京某區の選擧に應じ下院の議員とハなりぬ。抑も此選擧に付てハ餘程の內情ありける事と知られたるが是より先き會議所の幅利なる赤螺、皺井、鮹川、股倉、灰汁墨、なんど云ふ宗徒の面々

ハ竊かに或る所に會して清水を招き、時に清水君今晩ハ折入て相談がある貴公も御存の通り我々ハ純粹潔白の商人で(原ハ士族上り官員上りの御役所町人なれば當人が純粹潔白と申すハ頗る請取り難きものなり)政治など〻云ふ事ハ固より不得手うの實、内閣が何黨であらうが政府が何主義であらうが我等が儲の口さへ傷が附ねゞ平氣の平左衛門高見の見物左衛門で相濟めど此節ハ追〻に世間が面倒になつて來て慢心黨が勝利を得ると其黨のお出入連中が甘い汁を吸ひ法主黨が勢力を得ると其黨の御用達がふらい都合を占ると云ふ危險い世の中に成たれば中〻油斷が出來ぬ夫も我〻が政府に丸で關係のない素町人なら宜ひけれど御存の如く莫大の資本を入れて事業を營むにハ夫〻に其筋の脈絡を引て居れば若し此の脈絡が切でも仕やうものなら一身の大事ハ申すに及ばず實ハ國家の爲にも不利益で御座る(ドウだか)うこで直接にハ我〻が身代の爲め間接にハ國家の爲に是非とも我〻社會の利益を政治上に於て保護して貰ばねば甚だ以て安心が成らぬ、右に付粗〻御承知でもあらうが我〻の燕子會でハ内〻何奴根伯の尻押をして何でも議院で多數を維持し我〻に都合の宜い法律や規則を拵らへお負に我〻の專有が百年も千年も續く樣に相談が附て居るが夫にしても味方が一人たりとも下院に多く列座せねゞ多數が取れぬ、イヤもふ多數ほど恐ろしい者ハ無い何程の名論卓説を持出して堂〻と辯じ樣とも向ふの方でハ勝手ふ饒舌れ今に見ろと云ふ風で取合ハずイザ起立と云ふ時に至つてドヤ〳〵と反對に立たまて見玉へ憐れや名論卓説ハ其死骸を傍聽筆記と存議錄に止むる計りで何の役にも立たぬ、ぢやに由つて我〻の味方を議院ふ出すが第一の方便とあつて拔りなく手を廻した所が今度幸ひなるかな○○選擧區の議員が痼氣衝心で腦病を煩ひ辭職する事に定まつたに付き其跡を貴公に遣つて貰ひ度い尤も貴公も懇意の夢野ハ議場にハ老練だし辯論ハ上手だ

しドウか勸めて我黨の議員ゝ仕たいものと内々誘つて見たが彼漢をかしく旋毛が曲つて「イエモウ僕ハ迚もお役に立ませんよ僕も先年政治海で失敗した以來ハ當分斯て政治に口を出さぬ覺悟、思召しハ有難う御座るが敗軍の將ハ與ゝ兵を談ず可らずマア〳〵今度ハ見合せませう」とすねて居るから相談にならぬ全体我々が舊來の好みを以て取持つて遣らうと思つたに彼漢が夫ゝ應ぜぬと云ふハ失敬の事さ、ナニ夢野ばかりが人物ぢや無い此方には心當りが幾多もあると搜して見たが實ハ頼もしい人物ハ差向き貴公の外ゝ無いに由つて改めて只今相談に及ぶが貴公議員になつて我々の爲に働いてハ呉まいか尤も選舉に付き資格に應ずる丈の不動産は我々の分を貸して進ぜやうし又選擧入費や選擧演説の雜用は都て我々が積金の中から支拂へゞ貴公にハ一錢の迷惑も懸申さぬ身体だけ持て御座れば夫で宜い世間でハ自腹を切て議員に成たがる中で骨折なしに議員に成られるとハ貴公に取て此上もない仕合ぢや御座らぬか併しさう成る日にハ十分に貴公に契約をして貰ハねば成らぬ其の趣意ハ「我等議場に於てハ勿論議場外と雖ども常に貴君方の利益を盡力して保護すべし、如何なる場合たりとも貴君方の説に反對いたし申間敷諸事何奴根伯の指揮を受けて議論の進退を致すべし」と堅く約束を立て貴公の自説ハ其時より全く廢して我々の機關とならねば相成らぬ是ハ慙涙の通則なれば別段に御異存ハ有るまいが念のために申入て置くサア清水君諾否の返答如何と問かけられたり。清水ハ怪しからぬ相談かなとハ思ひたれども此の連中には左もあるべき利已政略只今に初まつたる事にハ非らず、否ぢやと斷つて仕舞ハうかィヤ〳〵斯いふ機會で議員にならねば此潔ハいつまで待とも下院に列なる運あるべからすヨシ〳〵一旦これで議員に選擧せられ其上で自説を張るとも德義に於て敢て愧る所なし彼れ我を以て其利己の奇貨となさんと欲す假ひ他日これに反くと

も何かあらんと屹度思案を定め、段々の思召實ふ忝う存し奉る何にも貴君がたのお味方ふ付き議員と相成る上ハ法理と德義の許す限りハ及びすながら御利益の保護者と相成りませうと潔く承諾したり。去らば相談ハ茲に極まつて扨こそ清水ハ國會議員に選擧せられたれヤー清水君久しく御無音した頃日ハ議院開議中でお忙がしいで御座らう。ヤー乙女さんお珍らしい子……ハ―昨今ハ日々往來をしてお出なさるとナそりや結構ぢや、世間では此の夢野が清水君を勸めて社會の島廻りをさせ官員、政黨、紳商、國會、ブールス倶樂部、商人會議所議院とほつ突き歩行かせるから肝心の乙女さんの方ハお留守になつてホンノ折々の附合せ見た樣だ此分でハ清水君が終にハ新聞記者になつて其内幕を親ふであらふなどゝある經濟學者ハ評して居る位だから實ハ僕も迷惑仕る……かう清水君のお身も立派に固まつて東京選擧の代議士ふ成り清水M.Pと肩書が附た以上ハモツ御婚禮なすつても宜からうと夢野が深切なる忠告。清水ハ聞て、サレバで御座ります婚姻の事も此程から内々乙女さんと談し合つた事もありますが、先生實の所を申しますれば僕の議員に成つて居るも御承知の通り妙な關係からの事で御座れば此儘ふ繼續するハ不本意千萬、と申して愁に一旦議院に列なつたる以上ハ默々然として立つたり居つたり計りする提灯議員で居るも殘念なれば一度ハ重要の問題に付き十分の議論を以て滿胸の精神を吐露し其上で立派に退かう歟と存じますれバ年限中ハ勸め續き致さうとも思ハれませぬ、マダ〳〵此上に幾多の變遷に遇ハねバ相成りますまいと考へて見れば浮と今日に婚禮も出來ませぬ、尤も乙女さんも其所ハ得心で「妾の爲に卿の進退に障りがあつてハ宜くない程に妾も精出して稼ぎますれば卿も思ふ存分お働きなさい」と信切の詞まことに男まさりの氣象に僕も感激して居ますと云へば。乙女も側より、其通りで御座いますなんの三年や四年の事ハ待ますとも、夫が

夫婦に成らねば顔が見られぬと云ふでハ無しコンナに毎日往來をして居ますれど妾もお袋も安心いたして潔さんが心に叶ひまする身分にお成りなさるまで待て居りますから決してお案ふハ及びませんと言放ちたれバ天晴の女性かなと夢野ハ深く感じ入り、今に初めぬ事ながら乙女さんの御氣象にハ恐入つたよアヽ清水君ハ好い月日の下ふ生れ男冥加ふ叶つた人だと稱賛して種〻の雜話ふ移りしが清水ハ夢野が歸つたる後ふ乙女を同車にて駿河臺へ送り夫より時刻ふなりたれバ議院ふ出頭し其翌日には夢野が宅ふ音信たり

○第三十一回

是ハ〳〵オノルエーブルゼントルメン(英國にて下院の議員ふ用ゆる尊稱を夢野が清水を冷却て故と英語にて云ひたるものなり)遠路の處尊臨とハ恐れ入つたヤヅ〳〵是へと招したり。座定まつて後ふ夢野ハ清水に向ひ、時ふ清水君昨今議院の狀況ハ如何で御座る新聞も碌〻讀まぬから悉くハ存せぬが慢心黨ハ愈〻死勇黨と合從して今度ハ内閣攻擊に取懸ると云ふ評判ハ事實か子昨夜も神田倶樂部で聞た風説でハ右の兩黨聯合で撰舉權擴張案を提出して内閣に向ふ計略を定めたれバ内閣も亦風潮黨と連衡して是に當り殊によつたら解散をも行なハうと云ふ決心ちやと云ふ事だか本統だらうかと問ひたれば清水ハ苦笑して、先づ表面の景氣ハ左樣にも見えますがナーニ裏面を覗へば何方もソンナニ立派な運動は出來ませぬ樣で御座る、世間から見ると今日の内閣ハ法主黨と變心黨の中で指折の歴〻が顔を揃へて組織し

たる内閣なれゝ中ゝ鞏固なりとゝ見ゆれども其實を申せば非常に頽敏で暑さふも又寒さふも感じが早いから案外見掛ほどでゝ御座るまい、尤も議院に於てゝ上院の方ゝ藩閥黨や錦靉黨が多いゆゑ内閣多數だが下院の方で内閣が僅に多數を今日まで失ゝざるゝ風潮黨が自分の利益の爲ふ内閣を助けて居るからで御座る併し御存の如く此の風潮黨ゝ神變不思議の黨派なれゝ今日ゝ自黨の都合ふよつて内閣を助くれど明日ゝまた自黨の都合次第で反對に同意するも計り難しとは黨派の總理が公然と名乘つて居る位モシモ風潮黨が舵を取直して方向を變やうものなら内閣ゝ忽ち少數と相成るゝ必定で御座る夫故に今日の處では内閣の趣意に少ゝ適ハぬ事があつても風潮黨の説ならば枉て採用する結果で御座るが反對の方でも亦た「我等が内閣を取たら貴黨の利益は屹度保護いたすべし其恩賞は現内閣に些とも劣るまじ」と内々引張こむ算段を運らして居ますゆゑ風潮黨ゝ頗る大もてど何奴根は高慢の鼻を聳かし「ドウダ乃公の策は妙だらう」と大得意、併し風潮黨が豪商少數の利益の爲に國民多數の利益を犧牲に供するとは甚だ以て嘆息すべき儀で御座ると云ふを聞き夢野はきつと清水の顔を見て、イヤ是は貴君のお詞とも存ぜぬ現に貴君は其の風潮黨の議員ぢや御座らぬか。左樣何にも風潮黨の候補で選擧に應じた議員で御座るが其實を申せば風潮黨の奴隷で凡う發議贊成とも都て黨派の指圖次第たとひ何程おのれの本意と違はうとも黨説に向つては一切異議を言ふべからす黨説を代表する機關なりと心得べしと云ふ嚴重なる誓約、うの代りには議員に必要なる不動産も黨員の中で名前を貸し其上に唯今の濱町の住家から宅の暮し向、馬車の入用ふ至るまで黨員の醵金で都て賄を附けますれば全く風潮黨の雇人同前、もしも黨説が氣に入らぬからとて自己の存寄でも議院に主張しやうものなら忽ちふ資格を取上げ住家を追立て兵粮を絶ち梵天國と相なつて議院に列席

も出來ぬ譯と相成る身の上、清水潔が身体も志節も茲に至つて全く奴隷の境界に陷りましたが先生ドウしたら宜う御座いませうと流石の清水もヨク〳〵身に徹へたりと見えシホ〳〵として語り出したり。夢野は大聲を擧げて打笑ひ、イヤハヤ君ハ呆れたる臆病ものかな、何の悔慙ことが有らうか、其黨派に入れば黨說の奴隷たること是當然の理なり現に各黨ともふ皆左樣ては無いか、黨派ふ加ハつて自說を枉まいと思ふは猶木に緣つて魚を求むるが如し誠に自說を枉まいと思ふならナンデ君は黨派の候補者とは成られたか既に黨派に加はり其黨の利益を共有せんと欲する以上ハ其身を以て其黨の使用ふ供するは毫も異しむに足らずソレが否ならナゼ初から斷然黨派に加ハる事を謝絕しなかつたか、彼の赤螺等が內談の意を奉じて例の青柿が僕の所に來て遊說したから僕ハ其時鼻で應接て返して遣つたが其後聞けば果して彼等が君を說き伏せた樣子、それも宜しと志た所で思ふに君の心中でハ一番彼等が機關となつて兎も角も議院に出た上でハ翻然旗色を替へて君子豹變と出かくる積りで承知したで有らうが彼等も去ものさうハさせぬ、ソコで君も亦風潮黨と成つたる上ハ十分に風潮黨の爲に働いて終にハ其首領になつては何だエ、隨分面白からうぜ、又議院ふ孤立して黨論に偏せず獨力を以て自說を張らうと云ふは何にも大丈夫の所爲にして潔は則ち潔なりだが中〻の至難で歐米の大政治家と雖ども得て能ハざる所なり況んや年少の貴君に於てをや失敬ながら君ハ未だ已の力を量からざるに似たりと云ハざる可らず(チト新聞の社說めく樣だが)去ればと云つて今更自黨に反いて他黨に變ずる位ならナゼ君ハ去年生質の勸告を斷ばつたか彼と云ひ是と云ひ今日に於て嘆息したり躊躇するハ男子の所爲で無い飽までも風潮黨の爲に少數の利益を保護するふ盡力し玉へ虫を殺して黨員先輩の指圖に從ひ塲合を見て其間に自已の意見を少〻づゝ述べ採用せられなば結構モ

シ廢棄せられなゞ夫迄として頓着せず漸〻と黨員の人望を得また議院の評判をも取て一寸上りに上り顔役に成つた時にヂリッと自説を持出し「サア乃公が目的ハ斯だ是で黨員が承知ならゞ黨派の中に居てやらう否なら乃公ハ其理由を公に述て黨を去る分の事」と此度ハ此方が主地を占めて黨員を客地に置て左右する樣にせねば政治家の實業は出來ますまい。ナル程夢野先生のお説ハ道理と實際とを見拔たる所でハ御座りませうが中〻夫までの問が我慢にも辛抱が出來ませぬ、風潮黨の豪富連中が巧に議院の權衡を左右して其間に自已の利益のみを謀る内幕を知てハ此の潔ハ良心に愧ぢて俯仰に天地も狹き心地が致しますれゞ寧そ此の黨議の奴隷たる地位を棄て退かう歟と存じ居ります先刻も此休がまだ浮て居ると申したハ此所の譯で御座る。ソウ小量でハ困る子併し左迄の決心とあらゞ此の夢野も強てお止も申すまいが一体今度の事たる君が初に出處を過まつたれゞ其退くふハ手際よく遣らねば進退去就ともに過る樣な結果を生じて上げも下げも出來なくなるゼ。其所ハ僕も考て居ますれゞ先づ何か一大問題が起つて其事柄がどふしても僕の本意に合ハぬ時があつたら其時こそ斷然たる議論を提出して潔ハ敢て私利に黨する者に非らずと云ふ心底を顯ハさうと思つて居ます。イヤ否ん〳〵君ハまだ若い〳〵ソンナ出し拔に冷水を浴せる樣な事をしてハ宜くない、モシ僕が君の地位に居るならば僕ハ斯するよ先づ今日の通で黨派に貳心なく忠義を盡し働いて居る中にハ必ず恕すべからざる利己主義の黨説が起るに違ひあるまい、其時にハ僕ならば黨員の内會議の席で十分に意見を述て其不可なる所以を切論する不、若し黨員が僕の論を聞入れて廢説とすれば夫で宜し、聞入れざる其時にハ「然らば拙者ハ良心に背いて諸君の私を助くる事ハ出來ませぬから此儀に限つて贊成ハ仕らぬ」と言放つて其席を退き黨員をして甚だ不安の心を懷かしむるぢや、夫から下院に其議案を

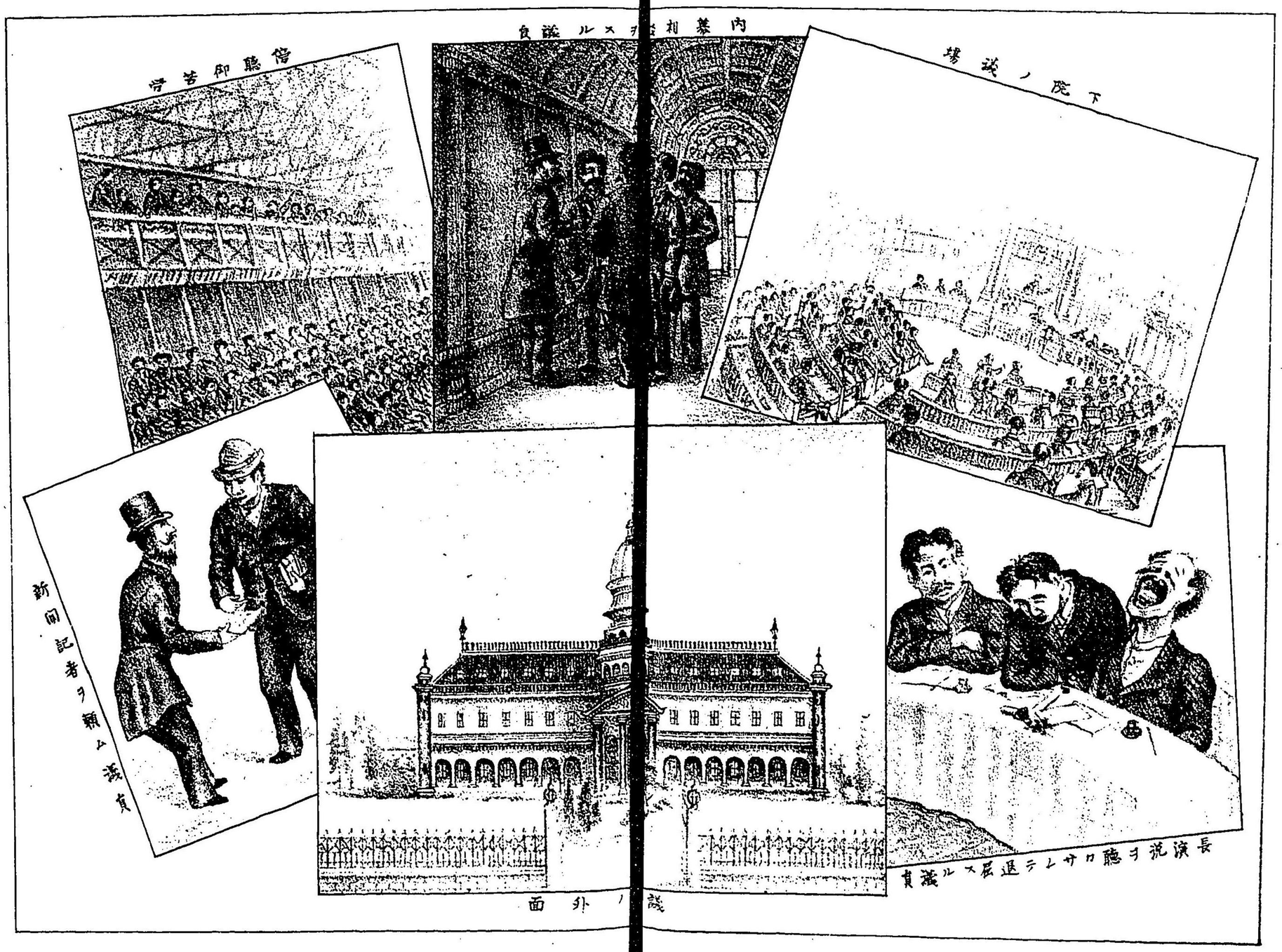
持出して愈々討論と云ふ日になつて大かた彼奴反對に立つだらうと黨員が案じて居る時に其日ハ態と欠席するぢや、ソレナ其議案が成立つた時にハアレハ反對ながら乃公が出席しなかつた故ふ甘く往つたのだと怨を被せる若し成立なかつた時にハソレ見た事か乃公が説を用ひぬからだと立身ことが出來る、斯樣な事が二度も三度も重なる中にハ必す世間に知るてアレ見よあの漢は風潮黨の正議論者だとソ〳〵評判になつて反對黨でもソロ〳〵目を附けて來る樣になると此度ハまた機會を見て俱樂部の演説に一番自黨の非を鳴らして見せ又その次に機會を見ていよ〳〵と云ふ場合になつて自黨に手ひどい誅議をなして手切の談判を遂げ其上で自黨の案に反對の説を議院で述べ其演説ハ攻擊よりも太だ嘆惜の意を多く顯はし苟くも風潮黨にして此議を止めゞ我豈に之に與する事を否まんやと云ふ樣に凜として大人い演説を仕て夫れで聞かない時に黨派を斷然と辭し世間の人をしてナル程彼漢が去つたハ尤ぢやと思はする樣にするナと夢野ハ平生に似ず恐ろしく眞地目の顔にて秘蘊の底を叩ひて説き聞かせたり

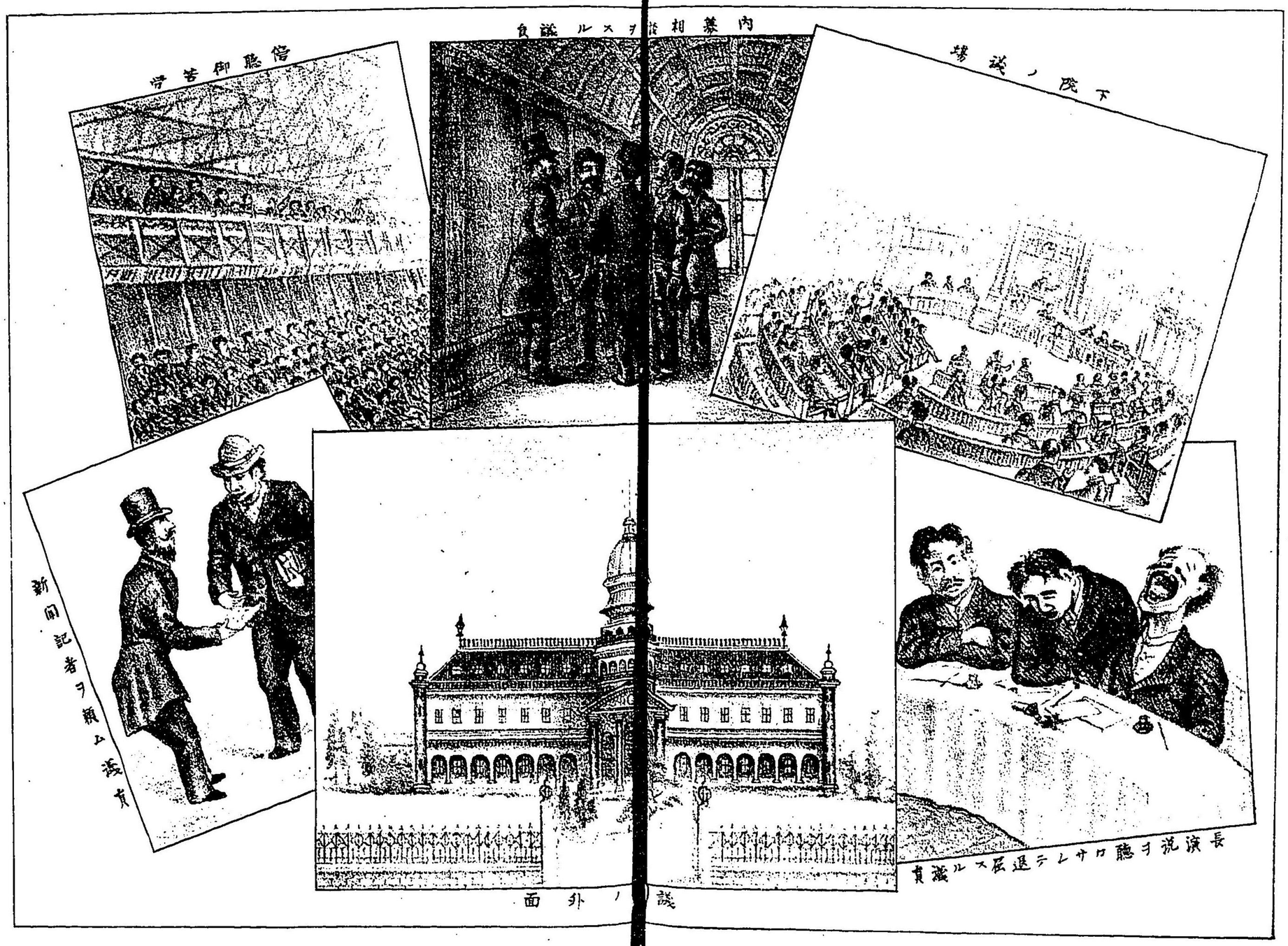
○第三十二

清水は夢野の説く所を聞き、先生の高論にて大に覺る所も御座りますれば何れふも終を全うする樣に進退を決しませうと云へば、夢野も悦びて、何にも左樣いたされよ勿論これが今日明日にと急ぐ事でハなし時宜を見計らふが第一なれば呉々も機會を誤らす去就を過らざる樣に心掛玉へ、……是で貴君が身の上の相談は相濟んだとして議院の

内幕は此節どふ云ふ塩梅だかチト話して聞せ玉へ僕などが往年府縣會だの市町村會だのに顔出を仕て居た時にハ誰某が少し議論を上手にすると云へば忽ちに其説に雷同して萬事みな其人の發議の通りに決議したりソウかと思へば少し勢力が多くなると直に其人を嫉んで反對の仲間を結合し「趣意ハ兎も角も彼漢の發議や彼の連中の説ふは拙て同意を致すまい」と可笑な所に力瘤を入れヤレ彼等ハ奚黨ぢやナニ彼等ハ木魚黨ぢやと互に相憎み相嘲つて札轢し其お蔭で代議をお頼み申た人民は頗る迷惑を蒙る樣な結果に出遇つた事が度々あつたが最はや明治三十七年の今日に相成つては左樣な事ハ御座るまいてナ。處が矢張り御座るには困ります子尤も黨派の情實は改ためて申さいでも先生には飽まで御承知の事ゆゑ其弊も委しく御明察で御座らうが頃日は益々烈しく成つて詰り政黨が主義に依つて樹立するとは嘘か騙し誠は私利を與にする目的を以て結び附たる明黨なれバ苟も利の在る所と見やうものなら義理人情は何のその間かよくハ親子兄弟の腕でも捻上げて引たくらうと云ふイヤハヤ恐しい心底の豪傑ばかり。されバ權謀術數は申すに及ばず我黨の利益の爲にハ悪語を以て人を傷、くるも可なり譏誣を搆へて離間するも可なり書生壯年輩を教唆して勸告の强迫を成さしむるも可なりと云ふ氣組で眼のあたりに元龜天正の紛亂を見るが如しとハなんと大變な世の中でハ御座りませんか、夫から議場の有樣ハ言語道斷の次第まづ某議員ハ選擧會の演説ふ堂々たる議論を以て政治上の弊害を痛快に攻擊し「余は云々の方法を以て此の弊害を一掃すべしと陳述したる人物なれを議席に就いたる上ハ必らず正議公論を以て立つであらうと新聞紙も豫言し世間も豫想したるふ豈圖らんや着座以來その默々たるハ恰も達磨の座禪ふ異ならず大方是ハ三年鳴かず鳴かゞ必ず人を驚かさんと云ふ大器量であらうと買冠つた人もあつたが此先生中々鳴かず驚かさずで毎

年の會議に沈默して居るゆゑ愈々其料見が分らず夫にしても餘り沈默にも程があると段々探つて見ると默々も道理その選擧演説ハ懇意の學者に作つて貰ひ其を俳優が臺詞を記ゆる樣に毎日〳〵稽古して選擧會の時に並べたと申す話し、又ある名望家の某議員ハ兼て議場に出たる問題を議する日になると程合を見計つて議長と聲をかけてスツクと起ち抑も此の問題たる……と說出す時にハ其辨舌の爽なるハ建板に水を流す如く瓢簞が徒足で駈出すが如く矢も楯も堪らぬ勢ひ天晴れ演說や政黨の御大將かなと敵も味方も感心する計りで演說を畢る時にハ喝采の聲ハ暫く其鳴を止めざる位なるに不思議なるハ此の御大將の說に向つて敵方から攻擊を下したり反駁を參つたりすると其の御大將が確と怒りおのれ我に向ふかござんなれと云ふ顏色にて再び起て再度の演說に掛ると初の議論に打てかはり其の不出來なる事ハ喩ふるに物なく事實が違つて論理が戾つて御當人にも仕舞


信聽御苦骨
内閣相談ヲスル議員
下院ノ議場
新聞記者ヲ顧ム議員
議ノ外面
長演説ヲ聽ロサレテ退屈スル議員


信聽御苦骨
内閣相談ヲスル議員
陛下ノ議場
新聞記者ヲ顧ム議員
長演説ヲ聽ロサレテ退屈スル議員
議ノ外面

にはドウ云ふ主意だか解からぬ様になつて散々の敗北、本膳と二の膳とは餘りの違ひコリヤどふだと不審に堪へかね其の仔細を尋ぬれば不出來も道理この御大將の演説は兼々腹心の黨員が寄つて掛つて相談を極め「斯々の趣意斯々の論法にて演説し玉へ」と兼々其の注文のお誂へが出來て居るから手際よく往けど二度目の演説へ御大將の腹から出た即席御料理でお座が醒る樣な仕合せ、右に付き黨員が申合せて「御大將の即席へ味方の不利と相成れば以來御無用たるべし」と嚴しく制止し此節へ其隣席に同黨員が着席して若しも御大將が不時の演説でも仕やうとする時には裾を引張て差止むる事に相成つて居ます、又ある金滿議員にへ内々にて書記に贈りものを致し僕へ不辨て發言が拙いから贈の筆先でよい樣に書て下されいと依頼して書記に全權を委任するもあり、又名聞議員の中にへ一人まへ當日の辨當料五十錢ヅヽと極めて出入のものを傍聽に頼み其人の演説の時ふへ何でも搆へ

ず無暗ふ感服して呉いと申付けたるに或る日の事なりしが其の感服の音頭取が生憎近眼で起立の議員を見損ひ隣席の人の演説を見違へて頻に感服して大に譴責を食つたと云ふこと、又ある庶飾議員にハ密に新聞記者や其傍聴速記者に交を結んで媚を呈し自己の説を褒めて貰ふ工夫をなし既に四五日前の事であつたが廊下の隅の所に速記者を招き「イヤ先生毎日〳〵御苦勞で御座います時に僕の演説の事ハ兼々貴社の大先生にもお願ひ申して置ましたれば何分宜しく御稱賛を願ひます休息後に僕が致す演説は是で御座るが(ト衣嚢より艸稿を出して速記者に渡し)どふぞお載下さい尤も場合によつてハ半分ほど辨じて跡ハ述べませんかも知れぬが明朝の紙上には此通り丸で御記載が願ひたい又この草稿ハ(ト別の草稿を出し)僕の演説を褒めて同意を表する投書で御座るが是ハ明後日の紙上に願ひたう御座る、是ハ先生輕少ながらホンノお車代(ト包ものをツツと渡し)お納め下さい、ソシテ大先生に明夕ハお待申ますから御退出から是非とも久保町へお出を願ひますと御傳言なすつて下さい宜しくハ先生もお出を願ひたい」とイヤモウお追從ダラ〳〵だがナル程其の注文の通りに拙ひ短ひ粗末な演説が翌朝の新聞には甘い長い卓越な演説に化けて出現し賛成の投書も出て世間の評判となるは妙で御座います、さうかと思へば議員体息所のヒソ〳〵咄し……例の議題ナあれに付いては彼の仲間から屹度相應のお禮をすると云ふ約束があるに今以て到來せぬハ如何尤も先方でハ議院を經過した上でと云ふ積りであらうが經過した後でハ先方が寢返りを打つてもまさか勸解に持出して約束違變と訴ゆる譯にも往まい、右に付きお禮の手附を請取り後金仕拂の約定書を握らぬ中ハ滅多に可決ハ出來ませぬと首領より内々の注意で御座る……○○保護金の案に同意して○○黨ふ甘ひ事をさせる代りに○○營業繼續案でハ○○黨も無論に同意すると申す事に雙方の幹事が昨夜内

談を取極めたれど今日の議場では其の積りで……コッ〳〵○○條例は僕には少し反對が仕悪いよ實は一昨夜總理の宴會に招かれ大層な御馳走で其跡で何となく餘り反對されては困ると云ふ樣な謎を掛けられたヨ、ソッか道理で今夜は總理から芝居の案内があつた、ヨシ〳〵御同樣に默つて居やうぜ、うれが宜からう總理には又いろ〳〵此方から賴む事があるからナ……オイ〳〵彼の特別稅議案子あの中で藝妓女俳優の二項は是非とも刪つて貰ひたい、君もどふぞ贊成してくれい、實は昨夜も新橋のお盆村松町の大黑兩國の惠比夷など云ふ一騎當千の百なり婆どもが僕たちを捕まへてヒドクいぢめたぜ、ナニモ恐るゝ譯も無いが彼等に吹立られては隨分うるさいからノー、そをに極度まで課稅したからつて幾許の高でも無いから全く刪ることに仕やう、ナンノ僕が私恩を彼等に賣ると云ふ次第ぢや無いが下流の事情を察して不當の課稅に苦しむ者がない樣に仕たい故だ子實の所この刪除說には內閣だつて內〻不同意はあるまいよ、とは近頃御親切千萬の風流議員なり)……此外澤山に議員の內證でなしが御座れど夢野君まづ今日は是切と仕ませう

○第三十三回

其心に慊からずと思ひながらも忍びて其事に勉强するは老成人たりとも猶これを難とす況や壯年の血氣盛にして若も活潑有爲の才を蓄へたる清水が如き人に於てをや清水は一旦誤つて其身を燕子會員の機關に供したるを愧ぢ如何にもして其の羈絆を免れんものをと考へ

たりけれを夢野が忠告に從ひ漸々に正議を會員寄合の席に提出し某件の專利策は然る可からず某議は敵方の說が至當なりなどゝ公平の意見を主張し初めたれを會員は次第に淸水を忌み嫌ひ「此奴我輩がお蔭にて議員になりながら動もすれを我輩が利益に反對する說を演るを不屆至極の惡物かな此分では獅子心中の蟲となつて由々しき大事たるべし去り乍ら浮と此奴を追出さを忽に敵方に加はつて何なる妨害を成さうも知れず只何となく敬して遠くるに若ず」と斯る事には拔目のなき連中なれバ密に淸水を疎外にする策をゞ廻らしたる淸水ハ固より覺悟の上の事なれを敢て意を止めざれども是よりして淸水が勢力は次第〻〻に風潮黨の中にて減却し先づ尋常の老漢と一般とハ相成つたり、と云つて反對の慢心黨や死勇黨では淸水は敵黨の中でも一種毛色の違つた人物だとハ認むれども我黨へ來り玉へお客分でお取扱いたしませうと特別の申込をなす程でも無かりしかを淸水は日蔭の夕顏が中途にブラリと下つたる如くなりき此上は大問題の議事に出遇つて非常の演說を爲して正議を主張し斷然風潮黨と分離するか否らずハ思ひ切て風潮黨の爲に盡力して其人望を恢復するかの二策あるのみ

玆に巢鳴伯爵と申すは前にも述べたる如く金紋先箱の藩閥より出で頗る勢力ある貴族にて上院に於てハ現に中立黨の首領なるが淸水が此体ゝ陷つたるを見て窃に淸水を招き申されけるハ……君が今日の立場の難儀は余も察し申すが議院にて獨立と云ふ事は餘程六ケ敷ヨ余が樣に不肖ながらも後進の躍に立てられて先づ功臣仲間で生殘つて居る老人株でさへ僕は藩閥が嫌なりと公言して正議を張るには中々骨が折る位だもの失敬ながら君の地位で今から獨立を押通すを が出來やうとは思はれぬ、君が心安いアノ夢野ナ余は彼漢とは御一新以來の懇意で幾と三十年の明友だが先年彼漢が黨派の事で大に世間

の名望を落し政治社會を退いて向島に引込まうとした時にソリヤ夢野アンマリ短氣ぢやらうがと諫たが夢野は有り難うハ御座るが先づ一旦は足を洗ひませうと思ひ切つて引込み夫れから超然獨立して居るが今日まで誰も彼漢を議員に選擧せぬぢや無いか、アノ夢野ハ世間て惡くも言はるゝだけ議論も文章も達者で口八丁手八丁の十六町と云ふ綽名を取つた漢なれば善かれ惡かれ民間では指折の人物、其ですら獨立では買手の無いが好い手本、だによつて獨立の望ハ先づ思ひ止まるが宜からう……併し風潮黨や慢心黨と進退するが面白く無いと申さるゝも尤ぢや余も其が君の爲に上策とも思はぬ……ナニ余か君の爲に氣を揉む次第も無いが染井(伯爵夫人の弟)が酷く心配して夫人共々頻ふ余に相談を掛るから一應君の心底を尋ねて見やうと思つて……どふだィッッ此所でハ議院を一旦出でモウ一度官員になつて見ぬか……東京に居て奉職してハ矢はり政黨に引込まるゝ恐れがあるなら寧そ田舍に避るが宜しからう夫にや地方官か宜ぜ、どふで選擧權擴張案が行ハるゝ樣になつたら地方官も入れ替ずハ成るまい迚も今日の樣に老人の隱居場所や才子の稼ぎ所にして置く譯にハ往かぬ、ソコで君も其の代謝ふ加ハつて地方官になり玉へ余がきつと周旋しやうナニ內閣が何と言はうが余か賴を丸で斷はる事は出來ぬからソコハお請合申すヨ……地方でも自治制を實行した以來は隨分議論が面倒だから君くらゐの才智で無くては知事は勤まらぬサ……と伯爵ハ信切に勸めたり

清水は深く伯爵の信切に感じ入り、一方ならざる閣下の御厚意は潔かに心肝に徹して有り難う存します、いかにも只今の地位は困難に相違御座らねを遠からぬ中ふ進退去就を決する心得で居りますが獨立の所ハ御高說の如く實に至難中の至難と承知ハ仕りますれど其至難に當つて見るも男子の望む所かと思ひます、尤も夢野も頻に忠告して呉ま

すが迚も此上黨派の奴隷で居る事も出來ませねを議院を退いて何か別に身を處するの計を運さうと存じます併し地方官は有り難いにゝ違ひないが此潔では勤まりません其も今日の内閣が明治二十一二年頃の内閣の樣に鞏固なる内閣で御座るなら潔が力の及ぶだけ勤めても見ませうが御存の如く何を言ふにも浮動政略で其主義のグラリグラリと變る事は文福茶釜の玩弄の如くそれ御覽じろ此通り八ッ八通に變りますと云はぬ計りの有樣なれば現に去年の地方官寄合の時に内閣は是々の政略を行ふに付左樣心得て地方の政治を執れとの嚴命を承り委細承知仕ると急ぎ任所に歸りゾレ郡長集會を行なへ。ヤレ參事會を召集せよと大騷をやらかして實行の支度に取掛り一年餘も骨を折つて漸く出來サア是から實行しやうとなつて見ると内閣は御沙汰止み、夫も議院の向背で内閣を擧て更迭になつた故ならば舊内閣と現内閣とハ政略を殊にすると云ふから致し方も御座らぬが内閣の人々は其儘で政略が變つて來るから變で御座るナニ貴樣の縣で支度を仕たによつて今更止めては困るとナ。其を内閣が知るものか言はゞ貴樣が醉狂でしたも同前だ、ナニ内閣の訓令があるとナ。ウリや貴樣が訓令を解し違へたのだと頭ごなしにお小言頂戴、ソリャ御無体と口を返へせば直に免職か非職それが怖いから左樣で御座いますか成程御尤とお受をして其場を濟し縣に歸つたらどふして胡魔化さうかと肝膽を碎いて工夫せねば成りませぬ……夫ばかりで無いッリャ嚴しく遣れ。ヘイ畏つたと取締を附るとエー人心の折合を見ぬか。寛にせい。ヘイ畏つたと寛々するソレぢや寛め過た好工合にせい。ヘイ畏つたと云ふ狀況は左ながら湯屋の三助が熱湯ずきと温湯ずきの客に一所に入浴れたるが如し、少し任他を行なへゞ事業を放擲すると云はれ、少し世話すれは民業に干渉すると叱られ、京官が通りすがりふ一寸と見た計りの報告が標準になつて見たり、變な筋の緣曳て特別の命令が出拔に

天降つたりするハ今日に罕らしからぬ儀で御座りますアヽ、斯と知つたら明治二十一二年頃の内閣諸公の爪の垢を溜て置て今日の内閣諸公に飲ませたかつた少しハ正氣になるであらうに惜い事をしたと老輩が述懷するも實に左樣と存ずる事も多う御座います其代りにハ今日の地方官もハ亦十六七年前の地方官とハ大違ひで縣下に居る間ハ天子樣の次ハ乃公だと云ふ樣な顏附で上へ見ぬ鷲の爪を磨き横柄傲慢の振舞に屬官ハ乃公が家來で縣民ハ乃公か百姓だと思ひ丸で五十年前の國守氣取り願筋の叶ふも叶ハぬも蔓次第地獄の沙汰さは其通り況て人間世界ぢやものゝ〻ヤ當然の事。割の宜い地面ハ乃公が買取る。餘か有つたら分て遣る。乃公を置てお拂下とハ失敬千萬とィヤモウお話にならぬ事が澤山ある石川の濱の眞砂ハ盡るとも此お話しハ盡ますまいアヽ憂と見し世ぞ今ハ戀しきと地方の人民ハ昔の地方官を戀しかつて居ります……是だから有り難うハ御座いますが先づ其仲間入りハ見合せませう閣下惡からず思召します樣に願ひ奉ると事情を竭して述べたれは巢鴨伯ハ嘆息して……いかにもお主の言ふ通りぢやノー

○第三十四回

清水ハ巢鴨伯が地方官の勸をも爾退し斷然決心して黨派を去らうと所存を定めたる事なれを今ハ只管に其機會の來るをゞ待て居たる。夢野も斯く清水が決心の上ハ迚も止むるとも聽入ざるハ必定なりと覺つたれば其後ハ敢て强て諫もせざりき。また乙女は常々の物語に清水

が議院にハ永く列席せざる氣なりと聞き一兩度は何となく止めて見たれど女の意見を聞入るゝ性質にもあらず且つ斯る事柄に女が賢しらに差出口するも良しからずと思ひたれバ是も其後は強て言はず只々心の中にて如何なるべきやと案じ暮したり。去れど清水の去就よついては固より覺悟の事なりとは云へ或る朝乙女が新聞を讀て面のあたりに其事の發つたるを見し時には其の驚きは一方ならざりし

乙女ハ東京日〻新聞第四欄をば讀みてハ考へ考へてハ讀み平ならぬ愁の色をして半時ばかりも默然として居たりしが稍あつて首をあけ、

エ、お母さんこの新聞の樣子でハ潔さんハ愈〻議員を辭職したいとお言ひ出し成ずつた樣で御座いますよと云ふに母のお賢ハ打驚き、エーそりや本統かへ。本統で御座いませうコレを御覽なさいましナと手に持たる新聞を差出せばお賢ハ、ソンナ堅い字の新聞ハ私にハ讀めないヨ、マー讀でハ聞かせと深く案じたる体なるにぞ乙女ハ、ソンナラ拾ひ讀に讀で見ませうとて母に讀み聞かせり

○清水潔君の去就　我が東京選擧の國會議員清水潔君ハ愈〻下院を退いて其節を全うするの決心を定めたりと見ゐて昨夜神田倶樂部に於て選擧人に向て公然りの意向を演說したり原來この清水君ハ川柳氏退職の後に慢心黨の鼻高氏と候補を爭ひ遂に大多數を以て當選したる風潮黨の議員なり然るに風潮黨の主義ハ清水君も大体ハ初より同意なれども特に其黨中の一派たる燕子會員の利益を保護すると云ふハ素より甘せざる所なるに忽然りの候補者と成つて選擧に現ハれたるハ世人か深く疑を置く所なりき、特に我社長日置碧彦氏の如きハ清水君とハ信友なるに係らず君が風潮黨、否〻實ハ其の一部分たる燕子會派)の利器となる事を肯じたるハ甚以て其意を得すとて當時わが紙上に論じたる事ありしハ蓋し讀者の記憶する所なるべし爾來君ハ下院に座を占めて左までふ侃〻たる議論

ふ滿場を驚かす程の運動ハせざれども風潮黨の中にて勉めて公平の意見を持し自黨の利益に偏執せざるものハ即ち此の清水君なるを以て下院に取つてハ尤も重要の人物なりと認められたり、扨わが下院も數年以降ハ專ら政黨か各自の利益を爭ふの場と成り政治は恰も政黨の所有物の如くに成り往き公平の文字は幾と議場に於てハ地を拂ふ迄に陷つたるに清水君が獨力を以て之を矯正せんと欲せしは頗る難事に屬し偶々以て君を禍するに止まつたり、今や君は既に特別保護議案に關して異見を持したる爲ふ忽ちに燕子會派の憤を招きたれば獨立と云ハんよりも寧ろ孤立と相成つたり若し此上にも商業特例案に向て反對をなさを風潮黨にハ誰あつて君を助くる者なき樣に相成り君が復りの身を議院に置くを能ハざるに至るハ火を覩るよりも明かなり清水君も之を察見するが故に此の演說を以て所存を撰擧人に示し商業特例案には斷然反對すべし其爲に、議院に立つを能ハずんハ退職すべしと云ふ決心を明白にしたるなり斯てこう天晴去就を全くするの政治家なりと云べけれ然れ共今日に於て此の壯年にして末賴もしき政治家を議院に失ふハ我輩が太だ痛惜する所なり我輩ハ君が一旦議院を退くと雖とも幾程も無く大多數にて更に選擧せられて再び議院に參席あらん事を望むものなり

扨も清水君か演說の事は兼て新聞にて報告したるを以て聽衆は午后六時頃より神田倶樂部に詰寄せ七時前には最はや立錐の地なきに至れり其聽衆は〇〇選擧人を以て多數を占めたりと雖とも風潮黨、慢心黨、死勇黨、機會黨、法主黨、中立黨にて名を得たる人々も多く來集したり(但し燕子會にては青柳、股倉、赤螺の三氏のみにて其餘は末派の木の葉連中ばかり)七百六十餘人と註したり尤も夢野實君と日置著彥氏ハ何故に來會なき歟と怪しみたる人もありしが夢野君は

五六年以來政治談論の場所には寄附かずと誓ひ又日置氏は當夜法律研究會にて講義を爲せるを以て來らざりし趣なり、斯くて午后七時を合圖として清水君はフロックコートに勳章を附け大喝采の中に靜々と演壇に登つたり顔色は平日の如くには怡然たらざれども其嚴肅なるは自から奪ふ可からざるの決心を示したり聽衆の來臨を謝して後に其趣意を述べて云く

……諸君僕は敢て諸君が僕に委托したる代議の重任を故なきに辭するに非ず苟も此の重任を全くして諸君の委托に負くこと無きゝ黨派の羈絆に隘せらるゝ者の爲し得ざる所なるが故なり黨派の利益と公衆の利益とゝ素より同時に兩立すること能ゝさるを以て僕と雖とも是を兩全すること能ゝざるが故なり、抑も諸君が當初僕の不肖なるを棄ずして僕を選擧せられたるゝ僕か政治上に於て公平の意見を持するに由りし乎、然り〳〵將た風潮黨の候補たるに由りし乎、ノー〳〵否ノー〳〵に非ず實に風潮黨の候補たるを以てなり現に燕子會派ゝ當時うの指名會に於て僕を候補に定め選擧人諸君に推薦して其投票を求め種々の手段を運らして應選を買取たるに非ずや是を直言すれば諸君の中にゝ其投票を燕子會派に賣たる者もありしゝ非すや（ヒヤ〳〵ノー〳〵ヒヤ〳〵ノー〳〵）然れども是れ投票を賣つたるに非す誠に諸君の望と風潮黨の主義と同一なるに由て風潮黨の候補たる僕を選擧せられたるゝ固より正明の所爲ありき（喝采）……然に今日の風潮黨ゝ往日の風潮黨に非す其自由の精神ゝ既に朽廢して今ゝ其黨の一派たる燕子會派の機關となれり（然り〳〵）燕子會派ゝ巧に風潮黨の名を利用して黨員を籠絡し以て自派の機關となせり（ヒヤ〳〵）其機關たるゝ敢て害なしとするも所謂燕子會派が現時に於て風潮黨を左右して爲さしむる所の政策ゝ果して如何なる政策なりとする乎、僕ハ一々これを歴擧して諸君

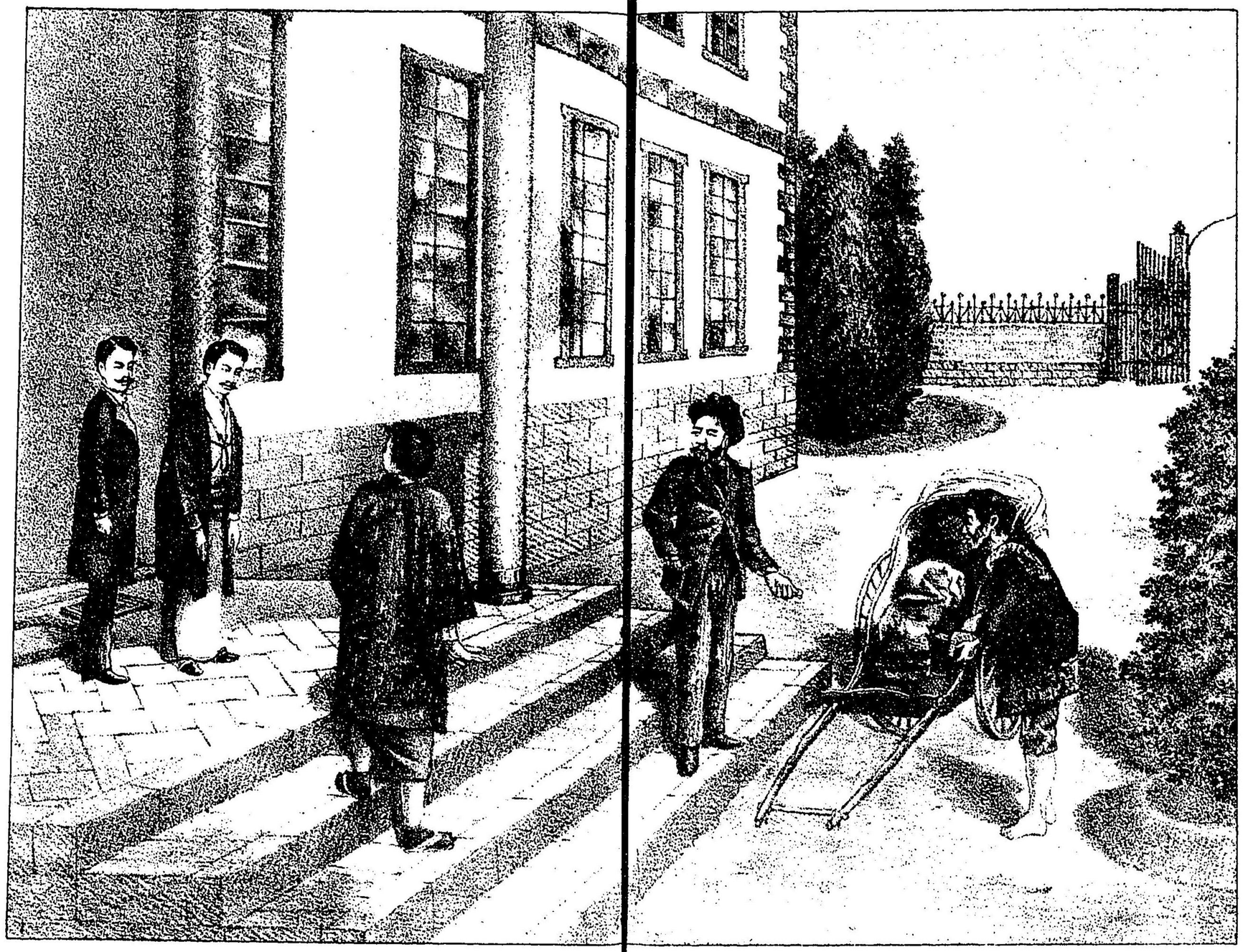
に示す事を好まず諸君は必らず既往の跡に就て十分に之を察知するを得らるべしと信ずるなり……今や特別保護議案は現に上下兩院の一大問題となれり此議案は公衆一般の利益を保護する目的ふ出てたる乎若くは其營業者たる少數の利益を私庇するの結果に歸すべき乎諸君ハ考慮を要せずして容易に之を判斷し得らるべし而して此の議案を提出したる者は誰そや即ち風潮黨にして實に燕子會派の立案に出たる者なり(然り〳〵)僕が「多數の不便を顧みずして少數一部分の利益を私庇するは猶ほ貧乏人の醵金を集て富貴の家に仕送りするが如し」と述べて初より此議案に反對したるは僕か不道理なるか(尤なり〳〵)或は僕を以て自黨に背く者なりと批評すれども僕が之に反對したるは諸君の意に背くの所爲なる乎(ノー〳〵我々の意なり)又今日の懸題たる商業特例案は今日の内閣が提出せる重要問題にして風潮黨、否、燕子會は之を贊成するに盡力すべしと相談したり而して此の特例は專有を與ふるの案なり其特例を得るものは誰そ專ら燕子會派の人々ふ非すや其特例は公衆に便利なる乎將た不便なる乎諸君ハ便否如何と思考せらるゝか(公衆に不便なり〳〵)果して不便ならば此の切迫時機に臨んて僕が斷然これに反對するは諸君の意ふ背かさる所爲なるべし(喝采)……右の如く諸君に背く事なきを勉むれば僕の敵は即ち僕の黨員中より起りて僕をして其言ふ所を達すること能はさらしむるの難狀に陷つたり……僕は如何にして此の黨派政治の問に立て公平の意見を達するを得べき、故に黨派を放るゝと共に諸君の選擧を辭して退職せさるを得ず……他日諸君にして黨議に關すること無くして僕を再選せらるゝ時あらば僕は喜びて其榮を諾すべし……願くは諸君その人を選て僕に代らしめよ而して僕が近日商業特例案に向て反對するの一論は即ち僕が暫く議院を辭するの訣別なり

○第三十五回

茲に染井某が邸ふて麻布狸穴町の一構、四十年前までに組屋敷にて江戸の塲末、たぬき蕎麥だの狐うなぎなど云ふ獣に縁あるものが名物にてありける程なれば其餘に推て知るべしであつたが御一新以來東京の繁昌が南に移り殊に市區改正の着手このかた麻布に滅切と流行の地となり只今では歴々ならでは住居れぬ塲所とはなりぬ、此の染井某に前にも述べたる如く巣鴨伯爵夫人の弟にて即ち○○縣士族なれば所謂る藩閥の出身その上に染井の父は維新の功臣にて賞典をも賜はり明治六七年の頃に死去したるが某は其の餘澤にて幼少の時より親戚故舊の世話にて學業を修め其後私費を以て外國に留學し獨逸に在りける時フト重病に罹りしに清水は平日左までの懇意にも非ざれど斯くと聞くより伯林より駈付け凡そ七十日許りは晝夜とも染井が側を離れずに看病したり染井は深く清水の信切に感じ此恩かならず酬ひざる可からずと心に誓ひたり、去れば清水が歸朝の後ふ其姉なる夫人と共に巣鴨伯に賴みて官員の事を周旋し夫より引續き巣鴨伯と清水の交際を媒し清水の事とさへ云へば陰になり陽になつて常に助をなせる信切もの當世には珍らしき壯年なり年輩は清水よりは五つ六も若く未だ三十に滿たざれど系圖はよし縁引は多し西洋から日本に歸るや否や忽に某大臣の秘書官に擧られ旭の昇る如き勢にて昇級し今では奏任一等上級の權威家の夫人には去年の春赤沙汰侯の媒妁にて火見入伯の令孃を迎へ愛たく婚姻を結びたれは是ぞ即ち芋と

お荻を搗交たる地固めドンナ地震が烈しく搖らうとも大丈夫の身の上なり尤も此の染井夫人が女學校に在りける頃ハ取分け乙女と心やすく唄など習ひたれば新婚の後も乙女とハ相替らず心置なく打語らひて交りをなせり、巣鴨夫人も亦乙女が清水に由縁ありと聞いて一しほ乙女を愛顧ふして令嬢たちの歌舞音曲の稽古を乙女に頼みたれハ乙女も常に巣鴨に往來して今日しも巣鴨夫人と同車して此の染井夫人を音信て奥なる一間にて芝居やなしや小説ばなし春の屋ハ誠によく婦人の情を察して書けど櫻痴居士とやら云ふ奴ハ口が悪くて面が憎いなどゝ噂してありぬ

旦那この邊で御座いますかと車夫が問へば、ムー大かた此邊だらう門に染井と云ふ表札が出て居るだらうから見てくれい。私ハ生にく夜るばかり手習しましたから。畫ハ見にぬと云ふのか古い洒落ダ實ハ余も少々チカ(近眼の略語)と來て居るから車の上でハ見え申さず候ダとマ



ゴ〳〵して居る中に巡査が向ふから來るを見て車夫ハ急に鉢巻を取り梶棒を握みながら腰を曲めて、ヘーお廻さまお尋申ますがアノ染井さんと申すお屋敷ハ……染井どんか、染井どん屋敷ハアン向ン角ッン曲つて右ン方ン大カ家ダ。ヘー有り難う御座い、ヘン御免サイ〳〵と走り往けば果して高塀折廻しの屋敷西洋風の門の柱に〇〇縣士族正五位染井〇とハ表札を打てありぬ、車夫が車を止むれば乘客が宜い引込と命ずる儘に門内の中央に五葉の松や・檜葉、槇なんど植たる圓形の車廻しをグルリト廻り玄關の前に車を卸したり。乘客ハ車を下り玄關の呼鈴の乳首をチント押せば取次の執事兼書生体の佞もの木綿のヘコ帶紺飛白の書生羽織、跣足と云ふ体裁にて出て來る、乘客ハ衣嚢から名刺を出し御在宅なら御目に掛らうと申込む、執事ハ怪しげなる西洋服を着てをかしな樣したるを見てコイッ有志家の壯士にしてハ年を取つて弱さうなりッヨッとしたら無心に來たのでハ有るまいかと心

に異しみ取次を躊躇する、夫と見て取りィヤ御在宅ならバノ昨日ハ態々御出で下さつて失敬いたしました其節の御約束に付き罷出たとお申上げ下さいと云ふにぞ、執事ハ安心してマヅお上りなさつて暫時アレへお扣へ下さいと玄關わきの一室を指ざし急ぎ名刺を持て奥に入つたり。客ハ車夫を振り返り、オイ車屋さん幾許だい。ヘイ御約束の通り七錢戴きたう御座います。ソウか山下の新架橋から此所まで大枚金七錢か安くも無いナと云ながら袴の隱しを捜し銅貨を出して勘定せしが、エー車夫公六錢五厘しきや無いが五厘負くるか。ヘー困ります子ー。成るほど負まい夫なら釣ぢやと拾錢の銀貨を渡せば車夫ハ頭を掻きなから、生憎旦那細いのを持て居ませんからお釣が……。さうで有らう持て居ると云つてハ都合が悪いナ、五厘ハ負けぬ三錢の釣ハ無いと云つてトウ〳〵乃公に拾錢出させる策略だナと車夫の顔をヂッと見る。此の時主人の染井ハ執事が知らせに直さま出迎として清水と共に玄關まで來り此体を見て其と執事に目くばし、コレハ〳〵夢野さん宜こそ御出下さつたドウぞ直にお通りをと挨拶すれば、夢野ハ振り向いて、ヤァ染井さん昨日ハ失敬をと答へつゝ猶ほ車夫の方に向ひ拾錢の談判を片付やうとしたり。執事ハ車ハ宜う御座る此方で遣しますから……と云ふに夢野ハ首を振り、イヤ〳〵車賃の立替ハ願ハいでも宜しいと云ひながら拾錢の銀貨を車夫に渡し、エヽ仕方が無い余の方で三錢まけて遣らうコウと知つたら先刻から思入れ威張たものを惜い事をしたノー車屋コウ談判が詰つて來ると金の在る方が七分の弱みダこんな大氣のお客ハ澤山なからう酷ひものさ子と三錢だけの澤を並べ泥だらけの靴をチョッと摺つた計りで直に玄關に上り案内につれて座敷へ通つたり

夢野ハ會釋も無造作ふして椅子に就き染井清水と三人にて浮世の雜話に移つたり。染井ハ頃合を見計ひて……扨て僕が若輩ものでお言

するゝ甚だ差出がましうゝ御座るが今日夢野先生に態々遠路の處を御入を願つたも實ゝ清水君の事に付て御意見を承ゝり及ばずながら愚存をも一應申上度い故で御座る……乙女さんも内々大層氣を揉んで御出なさると愚妻も倶々苦勞いたし又巣鴨の姉も心配いたして居りますから昨夜僕が巣鴨に參つた時に「其事なら私も氣に掛りますから明日ゝ清水君を私方へ招いてゆる〳〵相談する積りに先ほど夢野先生へも面談して置ましたれば明日ゝ午後より三人が私宅て會合いたす筈で御座る」と申たれば姉も伯爵も大に喜ゝれ「そんなら妾ゝ乙女さんを誘て午過から卿の方へ參りませう清水さんの事ゝ卿忘れてゝ濟ませんよ」と申して姉と乙女さんゝ一時ごろより參られて奥で愚妻と三人お話し最中で御座る……勿論僕が何と云つたとて役にも立たず清水君も御聞入ゝあるまいが膝とも談合又よい工夫が出まいものでも無い、夢野先生の御分別もあらうから篤くりと將來の處を承り置たい……品に寄たら巣鴨伯も清水君の事ならゞ肩を入て御加擔申されるで御座らう程に餘り早まつた事ゝ宜く無からうと存じらるゝ……尤も清水君の才學智識でゝ假ひ只今ゝ一旦議院を退かうとも世の中が進むに從がつて世間が君を打遣つてゝ置かぬ是非ともにと勸むるゝ知れたを清水君が出やうと思へば何時でも再び議員に選でるゝゝ容易なりと僕ゝ信じて居ります、其所ゝ氣遣ないが差向き議院を退いた上で君ゝどふなさるお積りかと問ひたるゝ清水が進退を案じて苦勞せる染井が信切に餘れる問なりき

○第三十六回

斯くて清水ハ夢野染井の兩人と共に是より先途の談合をなせる所に巣鴨夫人と染井夫人ハ乙女を誘ひて此所に出で來り俱に其の談合に加ハつたり。清水も最初の程ハ既に燕子會派と意見を同くせざる以上ハ斷然議員を辭職して議院より退身すべしと言ひ張たれど夢野ハ之を止め其儀ハ餘り速り過ぎたる決心なるべし現に○○選擧區の選擧人たちハ「清水氏が何黨に合すると否とに係ハらず固より清水其人を選擧したる次第なれば黨派離合の故を以て辭職することハ然る可からず是非とも年限中ハ在職せらるべし」と決議し其趣を清水に公然と通達したる位なれバ年限中ハ獨立にて議院に參席あるべし。次に何奴根伯とも相談したる處が「清水氏が去就ハ隨意なれども我が黨内の諸派ハ知らず我黨の主義より視れば清水氏の所見ハ稍々温和派に傾きたる丈にて更に主義に背きたるに非ず余ハ今日までも清水氏を以て尤も重要なる黨友と心得るに就き同氏の辭職ハ甚た其意を得ず余ハ飽までも清水氏と方向を同くする者なり」と今朝も俱樂部にて諸人の前で僕に公言せられたり。彼是もつて今日に於て議院を去るハ選擧人に對しても何奴根伯其他の黨友に對しても然るべからずと誡めたれば染井ハ固より其説に同意し巣鴨夫人も乙女も共に此事を望みたれを清水も遂に之に從ひ然らば年限中ハ議院に參列いたすべし獨立と申す條その大主義に於てハ敢て當初の趣意に異ならざるべしとて思ひ止まつたり

然る上ハ當時清水が住居なる濱町の家屋敷ハ如何すべき、原來この家藏地面は股倉が所有なるを清水が議員の候補となりし時に表向き股倉より買取つて清水の名前に書替へ直に其金高にて股倉に抵當に入れたるなり尤も證書面の期限は未だ來らねど既に意見を異にするからにハ股倉の恩庇にあらんを面白からず依て斷然この家屋地面を股

倉へ渡して他へ引越すか左なくバ原の如くホテル住居を爲すべしと清水は言ひ出したり。夢野ハ夫も尤の次第なれど今俄に他へ引越してハ選擧人の手前かつハ世間の思惑も宜しからず暫時只今の分にて辛抱ハ出來まいか。イヤ〳〵迚も出來申さぬ浮かりすると股倉に出し拔けの催促に遇ひ立除を請求せられんも計り難し。ナルほど夫もさうダ隨分彼奴ハ夫くらゐの事を仕兼ぬ人物、併し急の思案も出ずと流石の夢野も染井も屈詫したるに巢鴨夫人ハ靜に清水に向ひ、女の差出がましい樣でハ御座いますが清水さん貴君は巢鴨が家屋敷なら御住居なされますか承ハる樣にと伯爵が申付ましたがと問ひたれば。何が扨巢鴨伯爵の御所有の地所家屋ならば此上も無いこと。ソンなら清水さん只今の御住居の、家屋敷の代を股倉とやら申す人にお拂なすつて奇麗に貴君の物にお仕なさいましナ、其金子ハ失禮ながら巢鴨が御用達申ませう尤も直に其お地所やお屋敷を抵當とやらにお入なさらうとも何とも其所は貴君の思召次第、そこらは染井へお話し下さいましと巢鴨が呉々も申されまして御座います……ナニどふで地面や屋敷をあの邊に欲いと存じて居ます所……少しも御遠慮ハ御座いませんと申入れれば染井も傍より、ソンナラ左樣なさつて宜しからうと頻に勸め夢野も亦巢鴨伯爵の高誼を無にすべからずと說きたるにゞ清水も夫程の義ならば仰に從ひ申すべしと答へて住居の事も定まつたり」斯なつて只今までの如くして居てハ儉約をしたりとて毎月の暮しに相應の入費が掛る是までの處ハ風潮黨の本部殊に燕子會から月々〇百圓づゝの費用を出したれど是からハモウ出すまい良や出しても僕ハ一錢たりとも受納いたす事ハ好まぬと例の通に清水ハ言ひ張つたり夢野ハ、されば其事サ僕も第一に氣が附たから赤澤に問合せた處が箇樣に返事があつたと懷中より一通の手紙を取出して清水に示したり清水ハ是を披て見るに其文に云く「御尋の一條ハ貴察の通り如何に

も我黨本部の資金中より清水氏へ向け毎月支出いたし候に相違無之候乍去此金ハ本會より出す所にて敢て燕子會よりのみ出すと申す譯にハ御座なく候へば彼會にて異議申張るべき理由ハこれ無く假ひ異議を申立るとも本部の幹事會計長ハ決て其異議の爲に支出を止むる事ハ致し申さず候將又本部の衆議如何樣に相變候とも小生が清水氏に對せる一身上の交誼ハ毛頭も舊に異ならざれど清水氏一身の爲ふハ力の及ぶ丈ハ相盡し可申候間御遠慮なく御相談奉願候云々」アヽ流石に赤澤ハ紳士たるに愧ぢざる人物かなと一座みな其義氣あるを感賞したり、併し該黨本部の補助ハ今更心苦し赤澤に迷惑かけん猶以て好ましからず此上ハ世間の聞へハ惡しくとも家計を縮め我身ハ著作者か新聞記者になつて稼ぐべしと清水ハ言ひ出したり。此の樣子でハ中々巣鴨や染井が何と云ハうとも其恩を被るべき景色も見えざれど一座姑く默然たりしに乙女ハ懷中より紫縮緬の帛紗包を出して清水の前に差置き、サア潔さん此に貴郎のお金が御座いますから是を遣つて是までの通りに立派にお暮し下さいまし此七千圓ハ元々貴郎の物で妾ども母子がお預り申して居たので御座いますとて彼の七千圓の公債を清水に渡したり。是ハ如何にと清水も夢野も共々に驚きたれど乙女ハ落付たる面にて、されば此の七千圓ハ潔どのが我等母子の難儀を見兼ね父君の遺物と名を附けて賜ハつたる恩金その時すぐにお返し申さうとは思ひしかど斯くまで厚い信切を背くハ却て道に非ずと母子相談の上にて受納いたし夫より其金の中を以て只今の駿河臺に引移り母子一家の暮しを初とし乙女の修業料まで何の不足なく取賄ひしが乙女ハ其中にも唄や踊の代替古をなして助教の手當を得また宅に居る時にハ覺えたる縫針の内職をなし母のお賢も同じく以前の如くに内職の稼を怠らざれば漸々に稼ぎ溜て公債ハ元の如く七千圓の高に成し今日でハ右の利息の外に毎月母子二人にて貳拾圓づゝも

稼ぐ樣になつたれば女暮しには十分なり去れば此七千圓を返すとて更に差支へ無し況て潔どのと夫婦の約束ある中なんの遠慮の入るべきぞ我物を我が遣うには心置あるべからず是は昨夜母と相談の上なれば何とぞ望の如くし玉へと理を分けて口説たるは天ぱれ貞女の鑑なり。一座の人々皆感に堪て扨も〳〵乙女どの母子の義心は恐入つたり然る上は清水君も乙女さんの意に任せて先づ一旦は此七千圓を受納して從前の通りに暮し玉ふべしと勸むるにぞ清水は容を改めて乙女に向ひ、格別の思召を以て惠み賜はる此の七千圓あり難く頂戴いたし申すべし此の御恩は死ぬとも忘れは致し申さぬと謝すれば乙女は少し顏を赧め、何のお禮に及びませう貴郎のお金であるものを夫が御用に立つたので妾は何より嬉しう御座いますと思はずこぼす一滴嬉涙の笑顏こそ實に美人の花なりける

サア斯う成つたれば清水君は是迄の通りに暮して居て其暇ふは著作なり新聞なり隨意に業を營なみ玉へだが併し乙女さんは是から公債の利子が無くなつて暮しにお困なさらうがマアどうするお積りだと問へば乙女は、サア其事で御座いますと私が存じ附たる一ト通りお聞なすつて下さいましと說出すにぞ一座みな耳を欹てたり

○第三十七回

夢野は襟を正して乙女に向ひ、貴孃は屹度コウと思ひ定めた料見がおあり成つての事で御座らうが先づお考の所を篤と承りませうと云ひければ、乙女は去ればで御座ります妾は思ひ切つて女俳優になつて一

働き仕ませうと思ひますと述べたるふぜ一座の人々ハ(蓋し夢野を除くの外)互に顔を見合せて餘りの事に呆れ果て暫し詞もなかりけり。清水ハ少しく面色を替へて乙女に向ひ、イヤ乙女さん貴孃にソンナ稼をさせてハ余の顔が立ちませぬ、ナル程我等兩人が結納を取替ぜたと云ふでも無く又世間でコウだと知つて居る人も無いから宜いとハ云ふものゝ余も男一匹すこしハ人にも知られて居るものが末始終ハ我が女房と思ふ女を俳優にしてハ第一に余の男が立たぬ、次に貴孃ハ余の從姉妹で現在余の父にハ親身の姪その人に遺し置かれた遺物の金を余が遣つて世間の觀を張り却て其姪に俳優の業をさせたと云つてハ父の位牌に濟みませぬ、苟にも清水潔が從姉妹、俳優になるハ不承知で御座る、余ハどふとも身の振廻しを附やう程に貴孃ハ此金で身分に傷が附かぬやうお暮し成さつて宜しからうと言ひながら彼七千圓の公債を再び乙女ふ押返したり。乙女ハジッと清水が顔を見詰め涙をハラ〳〵と流して申けるハ、なる程一寸お聞なさると左樣に思召すも御尤でハ御座いますが人にハ浮沈があるもの妾が母と二人で裏店の暮しに其日の烟を立て兼て居ました時に貴郎がお訪なすつて此の公債を下さいましたが其時にハ是や伯父さん(潔が父金作のこと)の遺物ぢやと仰しやつたれど貴郎の心から出た信切と存じて妾ども母子ハ貴郎をゞ神佛の樣に蔭ながら拜んで居りました其お蔭で今の駿河臺に引越て夫から妾が學校へ參り其が緣になつて貴婦人がたの愛顧になり今でハヤレ師匠だの教師だのと御丁寧のお取扱を受け貴人がたの夜會や舞踏會にもお招きに遇ひ何や彼やのお相手を致す樣になりましたのハ皆貴郎の御恩で御座います、其御恩になつたお方の爲にハ何等苦勞を致しても御恩報じをせねゝ成りませぬ設ひ元々の通り裏店に引込む樣になつても貴郎の御爲なら妾ども母子はさら〳〵憾とハ存じませぬ況て貴郎のお品を貴郎へお返し申すに何の濟まぬ事が御座

いませう、此お金をお預け下すつたので母子が取附いて先づ不自由の無い迄になりましたればお全体なら元金にお禮を添てお返し申さねば成らぬはずなれど其所へ親類だけに御勘辨を願ひ度と母も呉〳〵申まして御座いませ、それに此お金が無くつては明日から母子の者が困ると申す次第ならお差支へまで暫く拜借を願ひませうが仕合せにマア只今の所でハ母子が少々づゝ稼ぎますから朝夕の事にハ差支ゆるでも御座いませんそれから又貴郎ハ伯父さんに濟まぬと仰しやりますけれど伯父さんの御位牌へハ母子で申譯を致しますから決してお案じなさいますなと母も頻に申して居ります、又妾が俳優になつたからつて何も貴郎のお恥に成る事ハ有まいと存ます浮川竹の流に洗んで女の操を穢したら悪う御座いませうが藝道を堅く守つて稼ぎます分には舞臺と座敷と場所が違ふだけで唱歌の師匠や舞踏の教師も別に替る所ハあるまいと存じます不斷貴郎は演劇改良の事を演説して作者と俳優の地位が上らぬを往かぬと仰しやるじや御座いませんか夫を妾が俳優になるは悪いとお止なさるハ何だか少し分らぬ樣に存じますと飽までも人情を盡し義理を立たる乙女が口説には清水も感涙を流して詞を返す樣もなく巣鴨染井の兩夫人は洋服の狹き袖を顔に押當て涙にくれて居たりけり

巣鴨夫人ハ落る涙を拭ひて乙女に向ひ令嬢のお心だてに感心して此胸が一ぱいになつてモウ何とも申さう樣も無いがソレデモ乙女さん俳優に成つて舞臺に出るだけは止る工夫が無いかいノー、其をせねば身が立たぬと云ふ譯ならを仕方もあるまいが膝とも談合と云ふ事がある及ばずながら私も令嬢とは心安くするし此家の奥さん(染井の妻)もお弟子の事だし出來る事なら相談の仕やうも有ませう程に……と都合によつたら一はだ脱で乙女を助け俳優になる事ハ止めさせんと云ふ景色を見すれを染井夫人も側よりソリャお姉さまの仰しやる通

ゆ私も乙女さんの事ならどふとも致して上げたう御座ります(と云ひつゝ染井に向ひ旦那マァどふか仕様へありませんか乙女さんを俳優にせぬ様な智恵を考へて下さいましと云ふにゞ染井も倶々に、ソリャさうとも俳優になるへ好く無からう乙女さん茲へ一番僕どもに任かせて思ひ止りなさるが善い、僕共が決して悪い様にへ致さぬから……エー夢野先生ッウで御座るまいか……。夢野へ深く思ふ所ありてにや手を叉いて居たりけるが今この相談を受けて腕組を解き一座に向ひ、僕の愚存へ全く皆様とへ反對で御座る、是や乙女さんのお望の通り女俳優に成を止めない方が宜いと思ひますから僕へ決してお止申さぬ方が宜位に思ひ定めたものならや女俳優になつて一働するも好からう幸ひ劇場の座主にも座頭にも作者にも僕の懇意が多いから篤と乙女さんと談合した上で僕が口入をいたしませう……極妙だ〳〵十年前からして女形へ婦人に勧めさするが宜い男でへ情も移らず仕打が行居かぬと云ふ所から劇場でも一同が氣を揉で改良説を唱へトウ〳〵守舊論を打破り市川升之丞や岩井久米八を入れて團十郎菊五郎左團次など云ふ座頭株の相手を勧めさせる様になつたる以來へ女優も大に進んで來たがマダ〳〵品格や氣象が下流に染みて十分ならぬ所があるる、今日に於て我國の演劇が猶一歩を歐米に讓る所ありと世評を蒙るも畢竟へ女優の地位いまだ高からざるに由る次第で御座る、そこに今乙女さんが決然として身を梨園の中に入れ自ら技倆を試み様ものなら元來唱歌へ天性の美音なり仕打へ踊が十分にあつて行居くし天晴の女優わか日の本のパーチー、サルドーとも云へるゝへ必定……ナンの女だてら生意氣に男女同權論を説たり婦人選舉權を論じたりして世間の變物にならうより女優の大家に成る方が餘程卓見ぢや……乙女さん僕が同意する是非ともお遣りなさいと力を極めて勧むるに〆一座の面々へ左なきだに乙女の決心を引返さするへ容易かちざる

賤しいと云ふならば其ナ不見識の仲間にハ入らずとも乙女さん些と
も差支ハあるまいが……と辯じたれば清水、巣鴨夫人、染井夫婦ハ不承
知ながら當人ハ決心したり止る事も出來ざりけり

○第三十八回

其一人ハ四十六七ぐらゐの小肥りに肥つたる男子黒魚子の羽織仙臺
平の袴と云ふ拵へ其一人ハ三十八九ぐらゐ巻て云へば細面にてスラ
リとしたる体、正直に申せば馬面で背がヒョロ〳〵としたるハ日蔭の
桃の木と云つべき恰好此の肥つたるが東京新報の社長にて附會辯司、
痞せたるが同新聞の主幹矢鱈搔也とて何れも一癖ある人物とハ其の
容貌に顯ハれたり。矢鱈ハ少し許り瞑の下に生えたる泥鰌髯を無性に
ひぬくり廻し眼鏡の下にて雙の眼をマヂクリ〳〵と瞬きしながら清水
に向ひ……イヤ夫ハ失敬ながら尊慮が違ひます成程わが東京新報
も前年までハ種々の關係があつて或ハ黨派機關ともなり又時によつ
てハ乙な事情に墓まつた事も御座つたが此の搔也が主幹となつて不
肖ながらも紙上の責任を執たる以來ハ常に正議公論を目的として謂
ゆる黨せず偏せず王道蕩々たりと云ふ主義を以て世に立ち苟も國家
の爲に利ありと信ずれば是を贊成し苟も人民の爲に害ありと思へば
是を論駁し説の何黨の意に出でたるを問はざるハ尊公にも御承知で
げエせう、所が世間みな此の公正を喜ぶと云ふ證據にハ我が新報ハ黨
派の補助が無にも拘ハらず僕が主幹となつてから頻に發兌の數を増
し只今にてハ日々の摺高凡三萬三千三百三十三枚と相成つて居りま

に今また夢野が止へせで無暗に煽り立て薪ふ石油を注ぐ如くなるこそ怪からぬと思ひたれば巣鴨夫人へ堪へかねて、モシ〳〵夢野さん貴君は學者で御座いませうが世間の事と申すものへ左樣には參りませんよ、乙女さんが只今の身分なればこそ立派の所にも出られますが女役者になつて御覽じろ眞逆に藝人が上等の附合に入る事へ出來ませんよ夫に後日になつて清水の奥さんへ女優であつたと申してへ一生肩身が狹いぢや有りませんか……と難じたるに夢野へ微笑て、イヤ其や北の方の思召も御尤で御座いますがマー僕の申す所をお聞下さいまし何にも御沙汰の通り今日の所でへ藝人と云へば引くるめて下流に位するが夫へ技藝を業とする故に下等なので御座るか但しへ其人の品行が鄙劣な故で御座るか……技藝がある故に下等とあらば技藝家技術家へ皆下等に位して無藝無能の木偶の坊が上流であらねば成らぬ尤も德川幕府の頃にへさうであつたが文明の世界となつてへソンナ間違つた事があらう筈へ御座らぬ……シテ見ると其技藝を業とする輩が本業の側らに幇間の眞似をしたり御機嫌を取つたりして恥を恥とも思へず遂にへ本業そつちのけで其方ばかりに身を入るゝからソレナ藝人といへば鄙しむる樣になつて藝人へ寄生物と相成つた譯で御座る併し、ヨク〳〵今日の世界を見れば其の寄生物とへ獨り藝人ばかりて無い堂々たる官員紳士學者にも澤山ある現に尊邸に伺候する輩の内にへ十人が九人まで先づ夫で御座らう早く申さば昔の藝人と鄙しめた寄生物の所業へ今日でへ立派な人が奪ひ取つて仕舞つたから藝人へ本業の外にもはや内職なしと相成つて居ますぜ、女優とても其通り藝者や娼妓と同樣なものぢやと思へるゝから下流なりと鄙しめらるれど乙女さんが奮發してコレ見よ女優へ此の通りと看版を出して御覽なさい乙女さんの品格を劣さぬ計でなく女優一同の品格までが連れて上つて來るへ請合ぢや、……れでも技藝者だから

賤しいと云ふならば其ナ不見識の仲間にハ入らずとも乙女さん些とも差支ハあるまいが……と辨じたれば清水、巣鴨夫人、染井夫婦ハ不承知ながら當人ハ決心したり止る事も出來ざりけり

○第三十八回

其一人ハ四十六七ぐらゐの小肥りに肥つたる男子黒魚子の羽織仙臺平の袴と云ふ拵へ其一人ハ三十八九ぐらゐ巻て云へば細面にてスラリとしたる体、正直に申せば馬面で背がヒョロ〳〵としたるハ日蔭の桃の木と云つべき恰好此の肥つたるが東京新報の社長にて附會辨司、

靴せたるが同新聞の主幹矢鱈掻也とて何れも一癖ある人物とハ其の容貌に顯ハれたり。矢鱈ハ少し許り瞑の下に生えたる泥鰌髯を無性にひねくり廻し眼鏡の下にて雙の眼をマヂクリ〳〵と瞬きしながら清水に向ひ……イヤ夫ハ失敬ながら尊慮が違ひます成程わが東京新報も前年までハ種々の關係があつて或ハ黨派機關ともなり又時によつてハ乙な事情に墓まつた事も御座つたが此の掻也が主幹となつて不肖ながらも紙上の責任を執たる以來ハ常に正議公論を目的として謂ゆる黨せず偏せず王道蕩々たりと云ふ主義を以て世に立ち苟も國家の爲に利ありと信ずれゞ是を贊成し苟も人民の爲に害ありと思へゞ是を論駁し説の何黨の意に出でたるを問はざるハ尊公にも御承知でげエせう、所が世間みな此の公正を喜ぶと云ふ證據にハ我が新報ハ黨派の補助が無にも拘ハらず僕が主幹となつてから頻に發兌の數を增し只今にてハ日々の摺高凡三萬三千三百三十三枚と相成つて居りま

すが酷い事でゲーせう(うれなら配達に山王の猿を使へば宜いに)其で此節議院にも諸大家が各名説を振つて議せられますが斯樣申すと甚だ以て不敬に渉るの恐あれど實ハ隨分感服いたし兼る議論もあつて弊社の編輯局などでハ記者輩が笑話の料と致す事も御座るが流石に尊公の御説に至つてハ着々敬服の外なしでゲス恐らく今日に於て議論文章ともに世ふ秀でゝ政治家たるの本領を備へたるハ清水潔君貴下なりとハ是れ輿論の公評で僕の私言に非すで御座ス、……此程の御演説などハ尤も弊社の目的とする所ゆゑ速記者が草稿を持て返つたのを見ると其儘僕ハすぐに號令を發して暫く地方通信の組入を見合せよ別に入るべき草稿ありと活版掛へ申渡し其から急に筆を執て書ましたが即ち第二の社説で尊公のお説に十分の贊成を表し世論を動かしたる去る火曜日の文章でげェした、……其後通信員を差出して頂戴いたした投書ハ殊更結構でィヤモウ恐入りまして御座ス、其につき社主の附會氏とも内談を極め打揃つて罷り出ましたが……どふでせう尊公にハ一臂の力を弊社へお添下さる事ハ出來ますまいか實ハ附會氏ハ僕より其事を尊公へ願つて呉いと申ましたれど斯る大事ハ一人にて云ふべきに非ず一面識も無くば格別すでに貴君も僕と共に度々倶樂部にて清水公の御懇意を忝うする上ハ倶ゝ推參して親ばうと今日の休刊を幸ひふ罷り出てゲスと並べ立つれを附會ハ其後を續で只今も矢鱈氏が申ます通り閣下と弊社の新報と主義を同じくする上ハどふか執筆の御助力を願ひたう御座ります尤も是まで諸所の政黨より我黨の肩を持て呉い何百枚買つてやらうだの我派の説を贊成せよ其度に報酬金を出さうだのと累いほど申込があつて幾ど斷るに困る位で御座るが矢鱈と私が一切それらの申込を謝絶して(嘘ばつかり直に相談に乗る癖に)我が新報社にハ私謁請托を容れずと嚴重に致して居ります夫に編輯ハ主幹營業ハ私と兩人にて働らき居ますれ

ば左様な私利を顧みずとも先づ可なりに經濟も立て參りますから、ドウダカ覺束ないものだ、今日に於て新聞の盛なるを說けば第一に世人が指を東京新報に屈して日報、時事、報知、毎日、朝野の如きも皆遙に第二流に位して居ると云ふ證據ハ發兌の紙數で御座います此所に閣下が力をお入れ下されやうものなら益々紙上の光を增し忽ち發兌が五萬以上に昇るハ請合です。ソリヤ社主が申す如く發兌の增加ハ顯然でゲス凡ソ新聞の勢力ハ發兌の多きに在りとハ不動の原則なれば勢力ある新聞を利用せぬハ政治家の得策で御座いません斯く申すハ釋迦に說法なれど歐米の政治家ハ皆その機關を持て巧に運動を致しますに尊公にして是なきハ憚ながら御損でゲエせう……何の尊公の御議論が日々出ませうものなら一年を俟たずして英國のタイムス米國のヘラルド日本の東京新報と世界に認めらるゝ樣ゐなるハ屹度違ひ御座すめエ。必定左樣相成ませう夫に閣下ハ此節政治小說を書て御出版なさる思召だと申す評判もあり內々金港堂へ御相談になつたとチラリと承りましたが夫や小說も宜しう御座いますが著書の迂遠なるは新聞の迅速なるに若かず又小說ならを夫を新聞に載せても差支ハ御座いませんからどうぞ御奮發を願ひますと兩人にて交る〳〵混くどきに口說たり

清水ハ最前より宜い程に挨拶したるが先方でハ追々に油が乘つて中々思ひ止りさうも無けれバ屹度思案して矢鱈附會の兩人に向ひ……至極御尤に承はる成ほど政治家ハ機關の新聞を持たねバ成りませぬか僕の如き駈出し議員ハ申さば雜子の魚交り政治家と云ハるゝにハマダ〳〵世ハ遙で御座る其上に獨立と云ふより孤立と云ふ境界なれバ機關も何も今日でハ先づ用ゆる所なしと申すが有樣の所さ、併し書けと仰しやれを書まいものでも無いが、全体りの書に附てハ二樣の別あり其一は自已の爲にするもので即ち貴公の御陳述の通り政治家が

新聞を利用して自己の機關にするもの其二は新聞社の爲にするもので是は自己の都合を二の次にして專ら新聞紙が盛に賣れる樣にするもので御座る、若し第一の目的であれば此方が新聞紙の場所を借用して用便に供する譯ゆゑ無酬奉公は云ふに及ばず相應の禮も此方から出す筈なれど第二の目的ハ夫と反對で他の爲にするゆゑ其勞に依て得る所がなくてハ叶ひますまい然るに僕ハ只今の處でハ第一の目的が無いから愈々僕に書けと御相談ならば第二の目的で書ませうがマア貴公ハ何程の報酬を下さるお積りか承り度う御座ると問掛けたり。

附會、矢鱈の兩人ハ初から甘く清水を乘せ只夥で新聞の論說か雜報を書かせ樣と思つた所が當が外づれて少々ギョッとしたれども斯る駈引にハ物慣れたる附會ちつとも騷がず、御尤のお尋ね勿論手前でも其覺悟で御座いますれば、內實只今でも諸方の學者文章家に賴んで書て貰ひまする草稿料の第一等に三割增乃至五割增を報酬に差上ませうから一と云ひつゝ懷中を搜し蒟蒻版で摺たる表を清水の前に差出し一此表を篤と御一覽下され度う御座ります併しさうなりますと或ハ時によつてハ此方から論題の御注文をも仕り又如何樣の御名論でも是を載せてハ紙の賣れ方に障ると思へば返却仕る事も無いとハ申されません。そこらの邊ハ愈々御承諾と定まつたら猶篤と僕よりお打合せを仕りますでゲエせう……と話を後に殘して雜話に移り兩人ハ暇を告げて立去たり

門を出て顏を見合せて、エヽ少々困つたナ。ナニ困らぬサ彼奴に高い禮をしても書すれゝ夫が評判になつて少々ハ減が止まるだらうよ。併し餘り高くてハ續かないぜ。ナニ〳〵さうハ出しやせんと話しながら步行たり。清水ハ跡を見送つて、彼奴等ハ乃公をれだてゝ書かせる氣だナさうハ問屋で卸さないだがあの新報を使つて乃公が持說を述ふるも一策コリヤ一ッ考へものぢやワイ

○第三十九回

かくて清水ハ思ふ仔細の有りければ矢鱈搔也、附會辨司の申込を幸に東京新報の爲に蔭ながら筆を執る事と約束し漸々に此新聞を利用して其主義を擴張するの機關にも爲さやと望みたり。抑も此東京新報社と云ふハ銀座大通りにて間口五間の一等煉化、入口の正面にハ東京新報と見上る計の大看版を掲げ、店頭にハ受付掛、うの奥よハ注文掛、發行掛、配達掛、廣告掛と數多の手代がテーブルを並べて帳面を扣へ、中央にハ會計長が四方八方に眼をゞ配つて差圖をなせる有樣ハ假ひ内證ハ兎も角も商賣柄とて表面にハ派手を見せたる新聞社田舍ものが見たならを儲かりさうに思ふなるべし

社主の附會辨司ハ尤らしき面附にて一間を出で來たり出納掛に向ひ、今日の爲替ハ地方から何程入つたヱ……ムー左樣か、ソシテ府下の取次の口ハ……と問ひつゝ側にある出納日表を見て少々顰ぎ會計長に向ひ小聲にて、ヱーどふも斯ぢやァ困る子と呟きたるハ餘程入金が少ない故なるべし。此方の發行掛に向ひ、オイ〳〵今朝の摺高帳を見せなとて帳面を見て、ヱート今朝の摺高が貳萬七百三十枚(是ハ此社の内規にて摺高發行高、入金高ハ都て十倍に云ふべし但し警視廳への屆にハ賣高廿倍と書べしと定めたる故に二萬七百三十枚とハ其實二千七十三枚の事なりと知るべし)ソコで增減ハ五百八十枚の增で(實ハ五十八枚八十七枚の減(是ハ實數)ヤー又減つたナと思ハず云はんとしたるが急に氣が附いて故意と大きな聲で、否々又增たナァ斯う毎日々々

増て來てハ困り切るぜと獨語たる處に主幹の矢鱈が二階から降り來つて目くぜせするを見て引返して共に原の一室にゞ入りにける

受附掛ハ、ヘイ入らつしやいまし畏まりました明朝より配達でお屆申上ます、ヘイ〳〵御請取にお釣で御座います、毎度あり難う御座いますヘー お靜にと客を返し此方を振向いて新得意の宿所姓名ハ配達掛に通知し、金○拾錢ハ出納掛に渡し夫々に通達をしたり書込をしたりする安排ハ左ながら機關の運動する如くにて天晴東京新報やと感ずるに餘りあれども是が今日はじめての新得意かと思へゞ氣の毒至極なり。彼方にては廣告掛がお客を捉へて此奴甘いと見て取つたか勿体らしい面をして……承知いたしました、どふか繰合せて明日の紙上に載る樣に致しませう實ハ此節廣告の依賴が多くつて好い場所ハ一週間も前から塞がつて居ますが外ならぬ御賴で御座りますれゞ何とか仕りませうと云ひつゝ三日分の廣告料を取つてお客を返したるが其實この社にハ廣告の依賴が少なくて立ち往かぬ所から廣告取次屋より五掛の口錢を出して手をさげてお世詞を云つて持て來て貰ひ夫でも足らぬから三日間の廣告を五日も六日も出して居ると云ふ內證とこそ知られたれ。社主の部屋にハ先程から附會と矢鱈の二人が差向ひのヒソ〳〵咄し……どふだ附會君今日もまた減つたか子。左樣また減つたヨ差引二十九枚の減だから明朝の摺高ハ貳千の內に喰込んだ此分でゆけば今月の末には目出たく千七百枚の內に潛るだらうさうだらう斯う減られては氣が引けて心底に任せぬノー君も御存の通り僕は一生懸命に編輯を主宰し隨分心にも無い荒つぽい議論を書たり怪からぬとは知りながら風說を載せたりして世間のお氣に入る樣にして居るが一体に世間が不景氣な所に他の新聞の割引が强いから叶はねエー、ソリヤさうと明日の紙は問に合ふか子。大丈夫だ洋紙會社の方は責て十分一でも入金しなければ迚も此上に荷を廻さぬがソレあの仲

通の新店の方で融通が附たよ……ナニ紙の事は心配にやァ及ばねェ、僕が出掛けて才覺して來ればマダ〳〵三週間は保つから安心し玉へ、併し活版印刷の職人が動かぬには困り切るヨ昨夜も隨分沸騰して給金を取らぬ中へ決して仕事に取掛らぬと罷工を初めたがヤット說得して鎭壓が行屆いたのサ。ソリャ恐入つた君が大風呂敷を廣げると職工が烟に捲かれて何時でも承知するから不思議でゲス、夫に引替へ編輯局の奴等にハ僕も閉口するぜ筆も碌々立たない癖に理窟ばかり並べやがつて迫り立るから責て三四日内に先月分の手當を三分一ぐらゐも遣らずは治安を維持する事ハ出來さうも無いぜ。僕も案じてハ居るが三四日の内にハ算段が出來まい尤も外に口を掛て置た所があるから月末までにハどふか工面しやう夫までの所ハ矢鱈君ナントカ說得して置き玉へ。仕方が無い權宜を以て言ひ伸ばすと仕やうが廣告の入金が少しハ有るだらうネ……。どふして〳〵廣告に手を附ざる附會に非ず廣告の入金を七、重にも八重にも書入てヤット先月を凌いで來たから今月になつてハ皆その方に差引かれチットでも此方の自由にハ出來ぬ樣に成つたッレニ廣告の依賴もめつきり減て來たからモウ内證の遣繰が付なく成て仕まつたヨ。ト云つて此所で君に力を落されてハ困るぜ僕ハ君と輔車唇齒の關係を持てコウ働いて居るのだから君に此社を棄られてハ進退維谷ると云ふものでゲス。安心し玉へ衰へたりと雖ども附會辨司苟くも我舌猶存する間ハ蘇秦張儀デモステーン、シセローの辨を振つて紳士を遊說し金穴を搜索して此社を維持するから案じ玉ふ事勿れ、ナニ金ハ浮もの借たら此方のもの減多に破綻を出す樣な事ハ仕ないよ、夫に附てハ君かの坑山一件ハ明日あたり少し攻擊の色を輕く顯ハして雜報に書てくれ玉へ實ハ今朝アノ手から一寸はなしが有たから僕が左樣サ主幹ハどふ云ふ料見だか分りませんが必らず思ふ所ありで御座いやせう併し僕からハ何とも言ふ

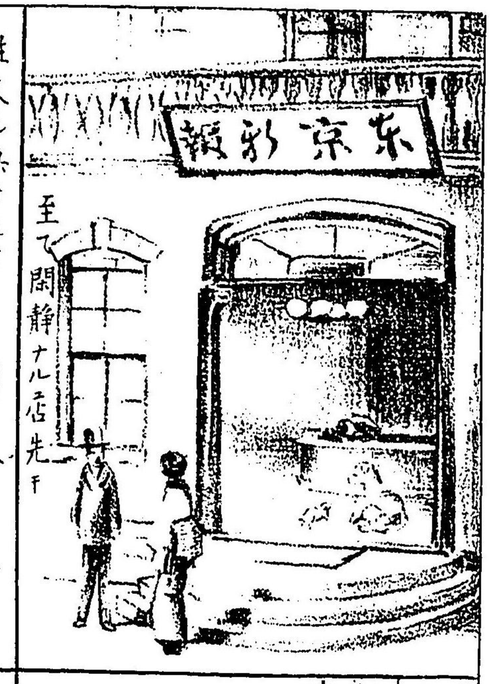
事ハ出來ませんと少々怖がらせて置たのさ、所で輕く色を顯ハすと屹度彼奴が明日僕を迎ひによこすに違ひ無しッコで夫ならバ弊社の都合が有るから斯樣〻〻と儼然たる談判を開いて强迫手段を用ひやう。よし〳〵分つた、處が僕ハかの坑山の騷動が初まる前に少し計り借て置たから攻擊と出掛るハ少々工合が惡いが、ムー妙策が有る、彼奴が君に對してモシ矢鱈も怪しからぬと云つたら「イヤ〳〵矢鱈の罪にあらず實ハ清水潔と云ふ新來が全權を握つて居て其漢の差圖には矢鱈も口が出せぬ樣子、うの清水は政黨上の關係から攻擊するので有らうと思はれますが尊君樣の御爲とあらバ清水に借を返して追出しませう」と說き掛てハどふでゲーせう。妙々く清水を奇貨に遣ふとは感心だ、エーヤ鱈君、君も少しの中に大層ポリシーが上つて來たナ。ソリヤ朱に交れば赤くなるハ當りまへョ朝晩附會君の御教授に與つて社會學を實修して居るもの幾ら不器用でも少しハ師匠の藝を覺ゆるだらうよ。ヘン不器用どころか出藍の才には此の辯司も遠く三舍を避て居るぜ……時に矢鱈君、どふか○○省の摺物を引受る都合は出來まいか此節○○條例の一件で○○省ハ竊に新聞を力に賴で居るでは無か。大賴みの事サ既に一昨夜○○大臣の秘書官より僕に一封を寄て暗に贊成の意を求めて來たが別に儲かりさうも無いから其儘で置たが……ソコが即ち附込み所だ委細承知仕る力を盡して贊成いたします其代りに何〻の摺物は弊社へ御命じ下さいまシと直に報酬の談判に取掛るに限る。ムーして其摺物の御用が下がつたら……（附會は算盤をパチ〳〵彈きて）コウだ彼の摺物が甘く下れバ直に○○活版所に下受をさせて間金の儲が貳千五百圓ハ有るぜ其內から散金を七百圓と引て殘が千八百圓。ソノ內を幾程僕にくれるか。思ひ切て八百圓出さう。キットかッとだ。締たと躍り上つて喜びトンと腰を掛る拍子に椅子はメリヽと破れて矢鱈ハ强に尻餅を搗き、アイタ……と叫ぶ。此時小僧ハ戶を明

て來り、へ！御用で御座いますか

○第四十回

編輯局ハ二階の一室にて表の通に向ひ凡う二間半に四間ばかりの一室なり主幹の矢鱈掻也ハ萌葱羅紗もて張つたる大なる書机を前に扣へ革張の大椅子にもたれ只今しも社主の部屋にて密談に及びたる社務の困難は些も色に顯ハさず悠然として煙草を吸ひながら机の上に載せたる原稿を彼れ是と讀み分けてありぬ。主幹の向ふには赤腹佩裳(白石の人)不知火拔轉(長崎の人)螺吹呑志(新潟の人)摺井少文(靜岡の人)目倉蛇助(中津の人)など何れも面色は一癖ありさうなれど胸中無一物囊中無一錢と云ふ悟道徹底の記者が机を並べて投書を製造するもあり雜報を書くもあり地方の新聞を讀で標を附るもあり府下の新聞に載せたる事柄を燒直すもあつて其繁雜なるは諸官省の執務の秩然たるが如きに非らず、左の角の方には校正者三人ばかり只今しも活版所より組込で廻したる草稿を讀み合せ居り、右の廊下の側にハ探訪者が今しがた諸方より歸つて原稿を認め居る最中なり。矢鱈ハ眼を八方に配り……オイ〳〵不知火君、明朝の社説ハ今日の續を書て居玉ふか……出來たら見せ玉へ加筆しやう……ナニ〳〵少しハ荒つぽく書かなけりや讀者の氣に入らぬぜ、ナニ我社の持論に撞着するからさうハ書けぬと、迂遠な事を云ふ可からず抑も僕が諸君と談して明言した る主旨ハ政治家ハよく世と共に推移ると云ふが主義で即ち機會黨の極意たる事諸君の知る通でゲス、今日ハ世間が右黨を是なりとするに

由つて是を助くれど明が日にも左黨が人心を得れば直に其の味方となつて忽に鋒先を右黨に向けて攻撃をするが是れ即ち黨せず偏せず善く輿論に從ふ所で我社の持論ぢやゲーせんか……少しも顧る所なく攻撃し玉へ。……宜しいとも〳〵麥原忍業氏(假編輯長)は間違つたら何時でも市ケ谷へなり石川島へなり出張しやうと云ふ覺悟を極めて居るから更に差支なしサと云ひながら遙か向ふの角に葛籠の中より原稿の反古を取出して調べ居たる書生を呼び、オイ麥原君何をして居るか……ナニ原稿を搜して居ると……搜したつて先月の反古が知れるものかイ、原稿の出所が分つても分ら無くつても裁判の決着ハ同し事だゼ……貴公だつて一度ハ往て來るが宜よ其お蔭で世間にも名を知られて顏が善くなるから早く言へバ官費生になつて洋行する位の功能ハありヤスと事も無げに諭したる体ハ成ほど酷い度胸なり


東京彩報
至テ閑静ナル店先ニ

注文モ無ケレバ
得意モ来モ
永ノ日ハ退屈ナ
ヨノ
ガヤ

承知イタシタ
廣告ガ
多クテ
場所ガ御座
ラヌケレト

ドウカ
算段ハ
出来マイカ
困ル子

虚デモ實デモ構ヒマ
面白ク書玉ヘ

ヨシロ相手ガ
金持ダカラ
思ト切ッテ
吹掛ヨウ

誠ニ恐入ッテシタ早々
正誤イタシマス
トウヤリ勘弁

今少々ハ助筆下サル
マイカハ退社トハ
短氣ノ至リ

螺吹ハ机の上に堆く積み重ねたる反古の間から顔を出して。モシ主幹公かの失敗一件ハどふしませう實ハ今朝兎野(探訪者)が聞出して來た所でハ夫ほどの事でも無い樣子、尤も先の女が心變りしたにハ相違ないが寐込で手切を取に往つたと云ふハ全く虚説らしう御座るが……。フー其なら君ハ丸で雑報に書ずに置く氣かどふして〳〵相手が立派な紳士だから是位の上材料を打遣てハ置けましネー、愚考では尾に鰭を附けて先の女が色男を連て紳士の玄關に寐込む所は切られお富の趣向で夫から細君のチン〳〵家中の大騒ぎとなつて遂に細君が内を飛出して東橋から身を投げやうとする所を俠が通り掛つて助くると云ふ芝居懸りの段取にし樣かと思つて居ますのんし。妙々さう舞臺を大きくせねば面白くない……併し螺吹君りの草稿が出來たら僕に見せ玉へと云ひつゝ螺吹を側に呼寄せ小聲にて、よしか其草稿をナそれ強持押狩腹心の社員にもたせて手を廻して先方へ見せ斯々の種が

上つて來ました是ハお禮をするから是非出して呉いと頼が御座りますが察する所御當家さまに恨ある者の所爲と思はれます勿論社主や主幹は御歴々の事をむざと書ては宜しくない大体なら止にせいと申付ましたれど何を申にも編輯局の若手が遠慮なく書と力身で居ますゆゑ甚だ當惑で御座います何とか御工夫下さいますれば如何樣とも取計ひませう」と乙に持込で痛くば放せと云ふ鹽梅に責掛たら纏まつた仕事ふ成るだらう。成つたら先生……。君にも内々で割を遣るよ

摺井君何を直して居るかエ。ヘィ農業會の演説で御座いまする。ソンナ面白くないものを出して三欄を塞げられて堪るものか。デモ是や農業に大關係があるぢや御座いませんか。大關係があらうが無からうが面白くなけりや讀者は無いぜ、それよりや福島縣から來た通信の中に死勇黨總會の演説が有るだらう其を書直して成たけ激烈の語氣を澤山に加へ其後に記者の批評を附け玉へ半分ハ褒めて半分は惡く言ふが秘訣だぜ甘く操釣てナ民權自由など云ふ所にハ思ひ切つて圏點を附けて置くが書生輩には氣に入るから其積りで遣り玉へ。赤腹は主幹の側に來り時に先生アノ外品輸入會社の一條で御座りますが實は只今螺吹や目倉とも相談いたしましたが昨日も〇〇新聞社の幸鳥氏が來て「貴社では定めし反對の議論もあらうが枉て賛成して呉い其代りにお禮は屹度させるから」と申たゆゑ何程お禮をするかと念を押したら五圓ハきつと請合つて出させると申ましたッコで私が一料見で御即答ハ出來ぬから篤と社員とも相談の上で御返答を致さうと申して返しましたが多分今日ハ返答を聞に來ますだらうと存しまする……併し五圓といふ相場ハない少なくも二十圓の直打ハあるナニあれハ幸鳥が例の手で向ふからハシッカリ取つて居るに違ひ無い一番ひどく打拂つたが宜からうと思ひますが如何御座りませう。ソリャ打拂つちや却て善くない……ヨシ〳〵幸鳥が來たら其儀に付てハ委細主

幹に申通じ置ましたをを同人へ御引合下さいと云ひ玉へ、さうすると僕が直談判で三十圓へ締て見せるよオイ〳〵目倉君内閣の更迭へどふ書くか子。左樣さダロウ噂をかり毎日々々同じ樣に書ても居られますまい……イッソ英斷で更迭をさせ「今度○○條例で敗北を取れば現内閣へ辭職する事に決したり然る時へ反對諸黨にて聯立内閣を組織すべし其人員ハ某伯が總理大臣で十省の大臣次官へ誰々くなりと内談へ已に整ひたり」と左も極つた樣に書出して新内閣の役割番附を出しませう、きつと世間が愕りして評判をしませう。感心〳〵其くらゐ先を越して掛らねバ世間の耳目を驚かす事へ出來ぬ流石に君の故國へ奇拔の人物を出す名所だけあつて着眼が高い子……ソウとも〳〵何も此方に責任があると云ふ次第で無いから翌日の紙上に正誤取消を出すのは兼て合點の上サ……その序に聯立内閣を今日に必要とする論を書て投書に出して見やう必らず他の新聞で攻擊するだらう其時の風並で此方の論も出さうか。御尤で御座る早速筆を下しませう

東京新報社の内幕へ凡そ斯の如し此外にもまだ〳〵澤山あるが書くも憂し書かぬもつらし穴探し棄つべきものは鹿の卷筆とは即ち新聞記者の述懷なるべし。清水は客員となつて眼のあたり此の現狀を目擊してア、扨も〳〵淺ましき境界かな是が輿論を代表する機關とは怪からぬ話し議院も議院だが新聞社も新聞社よくも〳〵揃ひに揃つたり、成ほど見ぬ事清し見れバ御座が醒るとは古人の名言であつたと嘆息し夫よりは再び足を新聞社に容れず全く其關係を斷ち暇あれバ閉籠つて專ら著述に從事したり

茲に乙女ハ女優となつて梨園の班に列せんと決心して其旨を言出したるに諸人みな不同意なりしに獨り夢野のみハ其儀尤も然るべしと賛成したりけれゞ乙女ハ夢野が周旋にて初より東京座と云へる第一等の劇場に出勤する事と定まりぬ。抑も乙女が今年十九歳の妙齢にて是までの境界に打て變り女優にならんと決心したる次第ハ如何と尋ぬるに其實ハ偏に清水が家計を助けんとの所存なり其故ハ清水が財産二萬圓の内を七千圓ほど分つて乙女母子に贈つたる以來ハ清水が歳入とてハ一ヶ年六百五十圓より多からず(是ハ整理公債一萬三千圓に對する年五分の利子)官員か役員にて俸給を得たる間ハ紳士の暮を爲して不足なかりしかども國會議員となつて濱町に新宅を構へ奴婢を使ひ馬車を置き以前に勝る失費なるに公債利子の外にハ別に是と云ふべき歳入の途とては無く毎月何程づゝかハ風潮黨の本部より仕送つたれど是とても十分に非ざれば清水ハ據なく資本に手を附て月々の不足を補ひ今ハ一萬三千圓も早や殘り少なに成りぬ況てや本部の仕送さへ絶果なゞ清水の難儀ハ的面なりと乙女ハ年若ながら此を察して母のお賢と相談して先づ彼の七千圓を清水に返し當座の入用に充てしめたるが去とて政黨の水の手が切れたりとて清水が俄に暮し向を縮めて逼塞なし世上に後指を差されんハ清水が耻なり、トあつて外に清水が收入を增加する手段も無けれゞ乙女ハ爰ぞ我身を以て且ハ是迄の恩誼に報ひ且ハ我夫の地位を助くべき時なり夫の爲にハ女の操を棄て浮き川竹に身を沈めたる人さへ少なからず女優となる程のを何か苦しかるべきと一人ふて決心を定めて扨こそ言出したるなれ夢野ハ其と覺り天晴の義節その志を空しくすべからずとて其儀に同意したりとハ知られたり

此頃東京にハ大小數十ヶ所の劇場あるが中にも大劇場と稱せらるゝ

もの五座あつて或は帝室保護の下に立ち或は文學社會の補助に依り又或ハ市紳有志の贊成に出るなど種々の事情ハあれど何れも宏大美麗なる建築にてれさ〳〵歐州大陸の劇場にも劣らざる美觀を備へ彼の十六七年前に有志の人々が演劇改良の說を起し是を實施するに苦しみたる時とハ雲泥の相違なり去れば俳優も其頃とハ追々に人を殊ふし團十郎、菊五郎、左團次、宗十郎等の名家も今ハ老人になつて專ら監督後見の任に當り若手の立もの等を引立て又女形にハ專ら女優を用ひて是にも中々男優に劣らざる程の上手を出したれば俳優ハ都て男女とも腕揃なり加ふるに十餘年前より文學に名ある先生たちが演劇の脚本を著し自から作者となつて高妙奇絕の趣向を競へるに付劇場と云ひ俳優と云ひ著作と云ひ三拍子揃つて進み大に昔日の陋習を一變したり但し其狂言が動もすれば高尙に過ぎて世情に適當せず時としてハ樂屋でハ聲を枯し土間でハ欠をすると云ふ狀なきに非ずとい

獨り新聞記者の冷評のみには非ざるが如し。却說この大劇場に出勤するにハ男女に限らす其俳優の身元より敎育實歷を取調べたる上にて見習として舞臺ふ出し夫より座附の俳優に取立る等の規則あつて頗る選擇に念を入るゝに付き出勤は容易き事ならねど乙女が音曲舞踏に巧なる事ハ兼々其評判あり特に夢野ハ演劇の著作に於てハ第一に指を屈せらるゝ作家にて演劇社會の尊崇あさからざる人なれば東京座の座主及び座頭ハ夢野の依賴に應じて直に乙女を傭聘し女形の附出しに据る事となし扨て淸水乙女と名乘らんも流石に面白からずとあつて假に雲野通路と藝名を附け秋狂言より出勤する事とハ定まつたり然る上ハ狂言は如何をべきと評議したるに夢野は余も乘掛つた舟いま更中途にて引く事は出來ぬ雲野通路が初舞臺に詰らぬ評判をされては座主座頭も迷惑だらうが第一に當人の名折れ隨て余の難儀、ヨシ〳〵茲は余が自づから筆を採て一体は政黨の事にからみ正義

の紳士が敵方の悪計に罹つて無實の罪に陷つて難儀すると其の紳士の婚約の娘が是を救はんと身を唄女に扮して諸方を流浪し危ふい目にも度々遇ふたる末に遂に尋ね當りトゞ敵の悪計露顯に及び夫婦になると云ふ趣向に仕やうと云ひ出したれば座主座頭ハ大に喜び先生の御著作で其の御趣向なら大入は屹度請合で御座る何分にもと依賴したり

元より東京の大劇場の其中で第一等と知られたる東京座さなきだに蓋を明れば平常大入を外さぬ芝居なるに今度ハ烏有仙史が著作の松操貞女譽と云ふ新狂言ゝれに雲野通路とて年が若くて藝が能くて拔ける程美しい女形が初めて出勤すると云ふ噂は早くも新聞に出て世上の評判となり其日を待兼たるに程なく草稿が上り本讀になり替古に掛り看板が上り番附になり脚本を賣出し愈々十月初日とはなりぬ此座の例として初日前に衣裝道具とも悉皆整へ萬事の手筈を定め初日より出揃の芝居なれ共當日の附込は引も切らず午後七時開場にて八時には早や客留となり桟敷より土間に掛て錐の立所も無かりけり其上ふ當夜ハ宮家御息所を初めとして奉り華族北の方姫君たち晴の出立にて御見物ありしかば一しほ劇場の光彩を添へたり見物の中にハ雲野通路と云ふ初舞臺の女優こう清水乙女なれと内々傳へ聞き其出場を待ち構へたる方もありけるが巣鴨染井の兩夫人には乙女が好みとは云ひながら諸人に面を曝す事の氣の毒さよとて初日の見物を遠慮する樣なりしを夢野が頻に勸め乙女よりも桟敷を進じたれば心ならずも見物に赴きたるに隣席は夢野より清水に贈つたる桟敷これも是非とも見物あるべしと只管の勸に心ハ進まねどお賢と共に參つてありぬ。兎角の中に乙女が出場の初舞臺となりけるが果して夢野の鑑定に違はず其技藝の眞に入つたるは老練の俳優も舌を卷いて驚き別て夫を思ふ一曲に至つては絶妙の技たれ敵するものもあるべ

しと覺えずとて滿場の喝采は鳴も止まず夢野は得意になつて棧敷に來り一座に挨拶し……どふだ見事な藝で御座らうがナ是でも貴卿がたは乙女さんの出場を御不承知で御座るか……僕の著作も此の名人を得て漸く其價を添て御座る……ナンノ著作の妙では無い全く俳優が善いからコウ面白く見ゆるので御座ると誇つたり

○第四十二回

雲野通路と云ふ名は初舞臺の一技よりして忽に世に囂しく誰れ識らぬものも無く上は高等社會の談柄より下は裏店連中の噂話しに至るまで寄ると障ると通路の事計り寫眞油繪錦畫の如きも十六七年前に新駒の福助が賣れたる以來これ程に行はるゝ者は是なしと云へり斯樣に世間の評判に譽を得るほどに舞臺に出ざる時とても何處の宴會此所の饗讌に招かるゝを屢々ゑて幾ど虚日なく其度ごとに所望せられて心ならずも唱もし舞もして興を助くるにず益々最厭ハ殖れども乙女が心中ふは太だ憂き事にゞ思ひける

茲は紅葉館の廣間にて歌舞音曲矯良會の大一座うの名譽會員は何れも貴顯紳士の面々床の間を背ふして正座を占め、特別會員ハ其右ゑ列し、幹事委員は其左に列なり、並の會員は其下に兩側にズラリと並居たり、幹事の周旋に由り今日は男女の俳優及び地方の重立ちたる輩を招き藝者お酌も宴會の定例として數多參つたるがやがて酒杯も一行したれで程合を見はからい幹事長は鹿爪らしく閾の際に出で今日の集會を開きたる趣意を述べ演劇歌舞音曲の改良を必要なりとする理

由を辨し名譽會員特別會員の諸氏が本會の爲に力を盡さるゝを謝し本會の目的の益々實地に行はるゝ證跡を擧げ技藝專門の[illegible]も
が本會の隆盛を喜ぶ旨を告け會員一同が愈々此業ゑ盡力せん事を望める旨の演說をなし滿座の喝采拍手を得たり(演說では中々に功能ある樣なれとも實際は甚覺束なし)其次に又一人の幹事が罷出て一際大音聲にて只今も幹事長が演說に盡したる如き趣意の宴會なれゞ技藝者は大に此會に隨喜し達て其技藝を諸君の眼前に奏し度旨を幹事に通知したり(其實は幹事が只管に賴みて來てもらつたる癖に)依て只今より其奏技を初むべしと口上の演說に再ひ拍手して響も止まざりけり(以前の拍手は御挨拶の拍手今度の拍手は面白からう早く始めてと云ふ期望の拍手なり)是を合圖に次の問なる樂屋にてゝ音取の響調子の聲など聞ひて地方の役人ゝ夫々威儀を正して座に就きたり、先づ第一番に出たるゝ當時俳優第一の座頭尾上菊五郎(寺島清)年ゝ五十に餘つて鬚髮の禿げ殘つたる所は盡く霜を戴き昔の面影を還さぬ迄に變つたれど技藝に於ては今以て色もあり香もあつて何に掛けても諸人に秀でたる拔群の名人りの日の出しものゝ當人新作の三番叟唱歌の文句ゝ長唄の式三番をゞ河竹新七の筆にて改正增補を加へ岸澤式佐の節附常盤津の淨瑠理もとより輕捷快活なる振事師の上手が意を凝したる所作なれば其見事さゝ限りなく天晴の所作かな此人が無からん後ゝ誰が此藝を演じ得べきぞと座に感に入たりけるが名譽會員や特別會員にゝ其妙所も分らざるか只々呆れたる顏付ばかりなるゞ無憖なる

第二番に出たるゝ其の昔より俳優の長者と呼べれたる市川團十郎(堀越秀)年こそ取たれ舞臺に上つてゝ誰れ爭ふものも無き古今獨歩の達人殊ふ所作ゝ壯年より其妙を得たる上に能の奧儀を加味したる上品の振舞その日の出し物は扇の述懷と云ふ外題にて與一が扇の的の昔

語り文句は烏有仙史の作にて節附ハ柞屋庄五郎の調べ十五年前の新作を秘置て未だ人に示さざりしを今日の晴に老後の思ひ出と演じたるなり然るに此の優美なる所作ハ爭でか會員の好に投ずべき只ナルホド〳〵面白い〳〵と云ふばかりにて何所が面白いやら何處が成程やら一向に分らず(其も其はづ菊五郎の三番さへ妙所が分らぬ位の見物ぢやもの)其中にはハテナ是が演藝の絶妙なる所かなと内心にて不審する人も多かりしならん可惜この妙技をば斯る盲連中よ見せたる事の悔しさよと夢野が清水と共に嘆息したるは實に理ある嘆息なりき

第三番よは雲野通路が山姥が所作(清元お京獨吟の淨瑠理)これは團、菊、兩老人とは打て變り今を盛りの美人しかも粧を凝したる出立なれば一座の歴々は藝よりも顔を眺め今一段高尚なる人は顔よりも其裾の邊よ目を注ぎて餘念なく手を拍くやら譽めるやら大騒ぎの中に舞納めたりけれゞ首席の何奴根伯ハ遙に聲を掛けて、通路マヅ〳〵是へ來玉へ一杯さそうと乙女を前に招き盃を差して、イヤ和御前の所作にハ恐れ入つた余ハ此の二十年來これ程に面白い踊を見た事は無かつたと譽そやせば側なる鼻髭長者も口を出して、左樣々々實に踊は年若の美婦人に限りますヱ、通路お前ぐらゐな美人になると默つて突立た計りでも澤山な所に手足を動かして愛敬を見せると來て居るから堪まらぬドウだ暇の時にハ余の別莊にも遊びにお出なと變に口を掛るを見て甘鯛男ハ、コレ〳〵鼻髭ッロ〳〵談判の端緒を開き掛るナ雲野ヤその漢の口車に乘つてハ往んゾ……時に町替君、今一ッ踊つて貰はうぢや無いか君ハ幹事ぢやらう周旋し玉へと云ふに町替博士は御尤々々委細承知いたしたが何を所望しませう。迚も所望する位なら此方の面白いものが宜い。サウとも〳〵アノ山姥は眞面でたんと面白くない。ドウだ今度は面白いものに仕て貰はう。僕は色氣がたつぷりあつて

氣の惡くなる踊が見たいな。僕も同意だ。ソンナラ嵯峨や御室は。二人が中ハ紀伊の國ハどふだ。みんな詰らんゼ。僕ハ矢べり、雨はショボ〳〵か紅葉番所にして欲い子。君の注文は多情が甚し過るから困る。デモ見たいちや無いか君だつても實は其方が見たからう。馬鹿いひ玉ふナ僕は伎藝の品格を愛する高尚な人物だもの。ヘン團洲の所作の時は居睡して居たちや無いかと兎や角言ふ中に注文が極つて乙女は今一曲と所望せられ今度は葉もので宜いとの事ゆゑ蓬萊を一ッ踊て逃ぐるが如くに退きたり

其後は藝者物出の御座つき幹事の差圖にて酒酣なる頃に若手の藝者とお酌とが揃つて音頭を踊り出すと。サア會員は大得意……旨いゾ〳〵小菊モソット足を擧げて見せろ……喏子、お尻の振邊梅が重いが扨は昨夜氣だナ……跳吉の色目が有り難いず……と八方よりの譽詞。それから今度は久振で喝惚が見たいとの御託宣に緋縅縮の襷で沖ハ

暗いのに白帆が見に出すと首座の歴々も浮れ出して盃洗の縁を扣き
アレハ紀伊の國蜜柑ぶねと唄ひ出し遂にハ甚九となつて名譽會員の
何伯が胴服一ッデ出掛くれを特別會員の何長者も尻をからげて飛出
しお酌や藝者の中に立交り櫓太鼓にふと目を覺まし明日ハどの手で
投てヤーろと足拵を掛けて藝者を座敷の隅に押し仆すもあれば甚九
踊らば品よく踊れ品の好いのを俎に取るそんなら余が俎だとお酌の
手を捕ふるもあつて滿場の歡聲は湧くが如くなりき是が歌舞音曲矯

○第四十三回

東京座は引も切らさる大入繁昌狂言は渡邊橋供養にて雲野通路の袈裟御前なり抑も此の橋供養は昔より狂言に書たるもの多く種々の趣向もありけるが今度は夢野が立案にて平家物語の長門本にある筋と角倉本にある筋とを折衷し專ら袈裟の貞節を眞に立たる趣向なれば袈裟が全篇の主人公にて此上も無き大役なるに乙女が巧に袈裟を演じたる伎倆には一座みな舌を巻き感服して置かざりけり去れば見物の評判の如何ばかり善かは當時の聲曲新報に記載せる所を見て判斷するに餘あるべし此の聲曲新報は歌舞音樂の事を旨として其批評は尤も世上に勢力ある筆なるに左の如くは賞譽したり

目下東京座にて興行の渡。邊。橋。供。養は有名なる烏有仙史の著作なれば其趣向の斬新にして奇拔なるは見物の目擊するが如し長門本角倉本盛衰記いづれに據るも遠藤武者盛遠が横戀慕より衣川を脅かし遂に袈裟御前を殺したる丈の本文なるに今度の新作は初に渡邊渡が家と遠藤武者が家の間に確執を生したる所を見せ次に衣川が富貴を羨むの情より約束を違變して袈裟が諫をも用ひず强て袈裟を渡す嫁らしむる件に移り盛遠の述懷となりて橋供養に緣を引き終に衣川の住居、袈裟の悲嘆、高樓の横死、盛遠の懺悔兩士の出家に畢りたる段取は甚だ面白く且つ巧妙を極めたり要するにセーキスピヤのロミオー、エント、ジュリエーの悲慘劇を轉化して橋供養に抱合せしめたれとも更に斧鑿の痕を顯はさゞるは仙史の狡猾手段なりと云ふべし。扨て袈裟は此全部の主人公にて實ふ座頭の任なり若し男優を求めて此役に當らしむるも故人田之助では少し下品になるべく菊五郎の加役では凄味が多かるべく團十郎の加役では色氣が無かるべしと首を捻つて考る位ならんに雲野通路孃が初舞臺を濟ませたる計りの若手にて此の大役を勸め然も點の打所なきは稀代

の名人なり、通路が容貌の美麗なる姿態の優美なるは天性の爲す所なれど別に言ふに及ばず我輩が尤も感服する點は第一に動作の高尚なると言語の都雅なるに在り何程に作者が傍より注意しても俳優にして心を高くせざるに於ては自ら言語動作とも野鄙に陷るの弊あり女優には尤も其弊の多きが習なるに獨り通路孃は敢て特別に注意せずして言行の高尚都雅なるは此優が尋常の出身に非ずして曾て高等の教育をうけ上流社會に立交りたるが故なるべし次に婆が初より終まで貞節と孝行を兩ながら全うするの志を懷き一身をもて其境に處するの苦心は尤も重要の所なるに通路孃は如何にして妙齢にて此情を知り得たるか驚異に外ならざるなり或は云く通路孃は曾て女子學校に在って音曲歌舞の教授を勤めたる令孃なりと果して然らば此優や未だ場に上らざるの前に於て演劇の妙趣をも俳優の秘訣をも疾ふ學び得て學問上より發明したる所あるの人なるべし今日にして斯る非凡の名優を得る事啻に東京座の幸ひのみにあらず我東京の幸なり……

右の如き佳評を博したる程なれば見物の最負は皆挙て雲野通路一人に集まりぬ。今日も東京座の下棧敷東の二間ものは名にしれふ何奴根伯の見物なりしが打出して後に茶屋某かたより通路が部屋へ使を立て、何奴根様の御前が是から濱町へ往て晩餐を喰るほどに太夫にも是非とも御出なさる様にとの御口上て御座いますと通知して返答を俟ちたり乙女は何奴根の座敷もとより好ましからねど此の伯爵へ劇場の幅利き貴族なれば無下に斷らんも惡かりなんと思ひ委細承知いたしました直にお後から上りますと答へ心ならずも支度して濱町へ赴きたり

茲へ濱町の翠多樓と云へる割烹店兼待合の奥座敷何奴根伯の一座その取巻にへ平常伯爵のお側さらずの老婆連……御前へ此問ッから

三度つゞけて御見物で御座いますが、ハ、ア拠ハ通路にお目が附きましたナ是や御尤様だ子ー。揺待町の女將さん。左様ゝゝソリャおほら姉御の云ふ通りァ、して置きやァ今に誰君かゞ手にお入なさるに違ひ有ませんどふして〳〵油斷ハ出來ませんよ、無駄河岸の師匠れまへハ何と思ふ子。さうとも〳〵此素早い世界だもの、まだ〳〵と思ふ内にオヤと云ふ所から白羽の矢が來て彼孃の家の棟に立つかも知れませんよと誘かされ伯爵ハヤッキとなり、サァ夫だから今日ハ乃公が通路を此處に呼寄せ思ひ切た談判を仕やうと云ふ趣向ぢやテ、尤も先達て紅葉館で逢つた時に一寸あたつて見たが何だか行屆さうに思ハるゝ。オヤ〳〵夫ならモウお手附が濟だのですかマー油斷も隙もならぬ御前さまダ……。否や手附なんぞと云ふ塲合にハ中々往かじやつた其所で今夜ハどふしても本望を達し度いが貴様たち手傳つて呉いエーカ。宜う御座いますとも私どもが精一杯太皷を叩いて好い時分に幕を切りますから其から先ハ御前さまのお腕まへで……ナニ〳〵彼の孃などハ未だ不熟でエせうから生なか私どもが口を出しては却て當人がショゲて出來る話しも出來なくなりますよ夫でお酒を飲ませてモウ好からうと云ふ程來を見計ひドロンを極めますから差向ひで……。ムー心得た〳〵併し噂話しハ仕て置けよ。宜しう御座います遠廻しに色〻な話を持かけて思ふさま氣を持たせて置ますから御前も其口うらを引て御覽ぜまし。必らず拔るナ。合點で御座りますと手筈の相談を定めたるが原より通路が堅固なる性質とても何奴根が掛合て藻掻ても追付く咄で無い事ハ百も承知で居なから眞實の事を言つてハ祝儀にも褒美にも成らぬ所から彼の老婆連中ハ慾と道連で頻に伯爵を煽り立てたるハ平常ながら酷い仕かたなり何奴根ハ左なきだに沸騰點まで上り詰めて眞赤になつたる所を煽り立てられて益〳〵熱度が高くなり乃公だつて二十年このかた其道に取てハ後を取つた事のない

豪傑だ通路が諾と云へふが否と云へふが屹度思を遂げて見せるぞ。そりや御前のお腕で御座いますもの屹度出來ますよ、ソレニ彼嬢だつて御前に御贔負になりや此上も無い出世で御座いますもの嬉しがつて御返事をするに違ひありませんよ。ホンニ年が若くて器量の宜い娘へ羨ましい子私が三十も若かつたなら。……。袈裟御前の腰元くらゐに成て。入せられませうと云ふのか。ハ、、、、と高笑の折から此家の女中が次の間から首を出してアノお師匠さん只今太夫さん(雲野通路)が見へましたと傳ふれば、左樣かへ直に是へお連なすつて……

○第四十四回

雲野通路の乙女が參つたるにて何奴根伯の座敷にへ席上はじめて花を發き更に酒を勸め肴を添へ大陽氣の宴とへなりぬ其景色へくだ〳〵しければ略して云へす夜も既に二時に近づくまで打騒ぎたる事なれば流石に酒ふ懸てへ剛の者と知られたる老婆たちも座敷に堪り得ず、或へ次の間で肘枕して前後を知らぬもあり、或へ廊下の角の柱に寄懸りて暫しの入定を極むるもあり、或へ手水鉢の側にてゲー〳〵言つて返上に苦しむもあり、或へ彼方の肘掛窓にもたれて白川夜船を艚げるもありて其中にへ業と外したるが有べきが兎も角も座敷の中へ最先の熱鬧に打て變り何奴根伯と乙女の兩人のみと成りにけり

何奴根へ兼て牒し合せたる事なれへ此の機會に乙女を承服させんものと思ひ床の間の柱にもたれながら、コレ通路ソンナニ眞面目で居なくつてもマア少し余が傍に來ても宜ちや無いかと乙女をおのが膝の

前に呼寄せて、エー通路さつき大黒や夷(老婆の綽名)から何とか話しが有つたらうと笑しく問掛れば乙女ハコイツ怪しいと覺り乍ら覺らぬ振にて、左樣で御座います何だか御前が肩を入れて妾を御贔負にして下さるからお禮を申上る樣にと先程もくれ〳〵申ました誠に有り難い事で御座いますと取つても附かざる挨拶ふ何奴根ハ少々堰込だる樣子にて、ソリや贔負にするとも是まで迚も其方が事なら思ふさま肩を入れ樣と云つて居る位だものの併しソウなるからハ乃公の言ふ事も聽て呉るだらうナ。何か存じませんが妾の身に適ふ事なら……。適ふとも〳〵其方が諾とさへ云へを直に適ふ事サ。ヘー其や何で御座いますか。ムー何サ何でも無いが其方が何して何さへすりや乃公も大に何サ、エー宜ぢや無いかと流石に口に出し兼て何々盡しを並べたり。乙女ハ益々怪しいと知つたれど宜い程に接らひて、ソレぢや妾にもさつぱり譯が分りませんが、時に御前この間粂此が尊邸で新物を踊つて大層出來が好かつたさうで御座いますが生憎拜見いたさんで殘り惜う存じます。ムー踊ハ熟かつたがナニ其方の藝に較ぶれを遙に降つたものサ。どふ致しまして彼人の振ハまた別で御座いますから中々私共にハ眞似も出來ませぬ先達て蜑女を舞ましたが夫ハ〳〵勝れたもので御座います此度上りましたら舞せて御覽ありべしまし。ソウか舞せて見やうが餘り面白くあるまいよィエ〳〵屹度御前の御意に入るに違ひハ御座いません、ソレニあの狛の胡弓ハ別段で御座いますヨ妾も樂屋で支度を仕ながら毎日〳〵聞て居ますが實に不思議で御座いますドウしてアー手が廻るもので御座いませうと話を外に紛らしたるに何奴根も暫時ハ紛らされて居たりしが餘りに話が紛れ過きて際限なけれど煙管をポンと叩き、コウ通路ッウ話を紛らしてハ困る子乃公が賴の返詞を仕て貰ハうちや無いかと言ひ出せば乙女ハ落付て、ヘー只今も申上ます通り身に適ひます事ならバ何でも伺ひませう。屹度ッウカ。

何の御念に及びませう。ソンナラ言ふが乃公の云ふ事を聽け。御前の仰しやる事とハ……。エー分らぬ孃だ乃公の心に從へと云ふ事だと言ひながら乙女が首元に抱き附かうとするを見て乙女ハ披き直つて膝に手を置き、モシ御前御戯謔ありばしては往ませんよと嚴重に構へ、アノ御前ハお醉ひ遊をした振をして妾の心を引て見やうとなさいますチ成ほど御最負に遊ばすからにハ其女が操正しいかどふかと試して愈々正しいと御承知あるをしてソンナラ最負にしても恥かしく無いと御鑑定ありばすので御座いませう、大丈夫で御座います決して御前のお顔を汚す樣な不仕だらは致しませんから御安心あそばしまして、ソシテ皆なが居ませんでお寥しう入らつしやりませう程に一寸呼で參りませうと其座を立掛けたれば何奴根は愈々堰込で乙女が裾を押へ、皆のものを呼ぶなら乃公が呼ぶ其方が參るには及ばぬ、其方の器量と云ひ心立までが氣に入つたから云ふ事を聽けと口説のに其返事もせいで席を立つとハ失敬ぢやらうぐ、サア否か應か返事をせい、只今も何事であれ身に適ふ事なら承知を仕やうと云たからにはヨモや此場になつて否とは言ふまいと又もや手を捕へ引寄すれば乙女は堪りかねて其手を振り拂ひ、ハイ否で御座いますと立派に拒絶る拒絶られて熱きとなり、通路其方は乃公に恥を被せ其上ふ嘘を吐くナー。なんの嘘を吐きませう。デモ身に適ふ事なら承知すると云つて承知せぬハ嘘でないか。ソリヤ身ふ適ふ事ハきつと承知いたしますが御前のお弄み物になつて膚身を汚す事は身に適ひませんからヘイ否で御座いますと申上たが惡う御座いますか。ソレが即ち乃公に恥を被せるのぢや無いか。何の恥をお被せ申ませう是が一旦夫婦の語ひをして心變をしたと云ふ譯でも無しホンの御酒の上の座興うれに側から見て居る人も無い差向ひの話し何も御前の御顔に掛る事ハ些とも有りは致しません。ぢやと云て乃公に言出させて置て斷るとは……。お斷り申す

が當りまへ妾ハ舞臺は働て居ましても女郎藝者とは違ひますれば。乃公が心に從はぬと云ふのか。幾ら御意があつてもハイ從ひませんと今は乙女も腹立まぎれスッパリと斷り一禮して其座を立ち出たり

何奴根は手ひどく乙女に刎附られ足まで女に斷られた事は數しれぬ位ふ多くあつたが是程に嚴しい斷に遇つたは是が初めて、腹は立つ間ハ惡くなる居堪らねをポン〳〵と手を叩き馬車に支度して燈を點ろと申附けいと云ふまゝに直に其座を立ちドシ〳〵と階子を下りて玄關に出る。老婆どもハ周章ふためいて方々から飛で出で、御前ナニがお氣に障りましたかマア一寸お待ち遊ばして……と止るを振拂ひ蹴飛して、エ、れのれ等までが通路とグルになつて乃公を馬鹿にしたナ失敬ナ奴共が……と罵りながら座を蹴立てゝ歸つたり。後ハ大風の吹たる跡を見る如くに悄まり返つて一座の面〻互に顔を見合せ默然たりしに乙女ハ平氣な顔で小座敷より出て來り、オヤお歸り遊ばしたのですか私ハ一寸はゞかりに參つて居ましたからツイお送り申上ませんで失禮を致しました皆さま私も御用が無くばお暇を申上ませうと已に歸らんとするを見て老婆の大黒ハ乙女に向ひ、時に太夫さん御前ハ平時に無い酷いお腹だちで私どもにもゑらい當り樣サお蔭さまで大事のお得意を仕損たヨ誠に有難うノー師匠と云へば側より夷ハ差出て、ソリャ太夫さんが否なら否で宜から工合よく接らつて呉れば宜のに餘まり打付に刎たから子ー……。ソーとも〳〵太夫さんハ夫でも宜からうが私共ハ困る子。ヘンお蔭で稼の田地が半分減つた面白くも無ェと老婆どもが本色を出して乙女に喰て掛れを乙女ハヘーそりやお氣の毒さま併しお前さん方ハ何奴根さんガ私に否ナ事を仰つしやつたのを兼てから御存じですかソンナラ私もお蔭さまで大事の体をすンでの事に穢され樣と仕ました姉さん方大きに有難う御座いましたと失平返しに返答して靜々と其場を引取つたり

○第四十五回

却説清水潔は巣鴨、染井、夢野別して乙女の信切の默止がたく議員爾職の事も思ひ止まり濱町の宅ふ其儘住居て著述をのみ業としたりしが思はざる筆の禍を招きたるゞ足非もなき、清水は爰に烟芋の煙にて名を揚たる代りに生質子爵や濱矢良伯爵の憎を被つたるに懲り其後は姑く政治小説を書かず專ら社會小説をのみ著したりけるに頃日あるる書肆の依頼によつて著したる「憂世の素面」と題せる小説は社會交際の眞相を寫し出して人の腹をゑぐつたる一大奇書なりけれゞ忽ふ世上の評判となり近來の名作ぞ讀や買やと騒ぎ立ち此小説の内にある甲某とは誰某の事ならん乙某とは誰夫人の事なるべしと思ひ〳〵の當推量に枝葉が咲て果ては夫に相違なし現に清水が自から云々なりと言つたり抔と到る處りの評判ならざるゝ莫く再び清水が名ゝ社會の持て囃す所となりしが右の當擦られしと邪推せられたる人々ゝ殊の外に快からず思ひて清水を憎み寄々に悪しざまに噂したるに由り遂にゝ豪富の人ゝ概ね皆りの方に同意したり。原來清水ゝ風潮黨を脱したる時に燕子會の怨を招きたれゞ左なきだに豪富の一部にゝ善くも思ゝれざる所に今また憂世の素面にて彼の輩が俗吏に攀縁て利己の計略をなせる摸樣ども遠慮なく書並べたる事なゑば其怒を增して死敵の想を成せるも亦理なりき、初の程ゝ夫も世の噂だけに止まり定めて七十五日ぐらゐで濟ならんと思ひしに日に增し噂か高くなるに付て怨ゝ彌々深くなりしかば現在議院にて清水が心底を知り切たる

人々までも豪富の勢力ゟ撼されて清水を友とせざる迄に陥つたればこそ清水ハ眞の孤立となりぬ其上に又悔しきハ此節雲野通路と假名して東京座に出勘せる女優こう實ハ乙女と云つて清水か宿の妻なれ女優の夫をば議員に選擧したるも可笑しと云ひうやし其圖に乗て清水を誹謗し或ハ新聞に投書し或ハ無名の書翰を送り退職あれ辭職せよと云ひ立たれば清水ハ最早堪りかねて斷然その志を決し夢野、染井、巣鴨へも相談に及び遂に病と稱し辭表を出して下院を退きたり、心あるハ皆清水が辭職を惜み此人にして議院を去るは議院の不幸なりと憂ひたれども尋常の輩は却て愉き次第なりと思ひたるゞ憂てき事にてありける

夢野は清水が住居を音信れて、イヤとふ〳〵辭職したナ辭職も宜からう又出掛る時節が有る哩……時に憂世の素面は實に輓近の名作僕も眞に敬服した君が著述の中で煨芋の煙と憂世の素面は一對の名作だが煨芋は氣を以て勝ち憂世は情を以て優り前者は眞摯にして讀で痛快なるが後者は婉曲にして綿裏に針を包むが如し彼の豪富連中が腹を立て骨に徹する計りの遺恨を含み君が肉を食はんと欲する位に憤ふつたも無理でハ無いぜ、曾て僕が君に諫た如く人世の毀譽は倏忽に來り又倏忽に去るものなれば敢て驚くに足らず僕ハ却て君の爲に今日の躓きを賀する子敵も味方も足で判然したであらう人間ハ失意の時に遇ハねゝ眞僞も是非も見分ぬもの足からして君が世に出るの途ハ開けて來るゼ屈せず撓まず益々筆を執つて志を伸べ玉へと慰むれば清水ハ大に力を得て、ソノ御一言で頗る心を壯にしたる樣で御座る實ハ此の兩三日ハ來る人もノ〳〵頻に悔やかり云つて丁度死者を吊ハれる心地が致した、ソコデ先生これから方向をどふ定めませうなどふ定むるも無い既に定まつて居るぢや御座らぬか僕が初め止むるも聞かずに政治小說を書き其爲に一旦禍を買ひ其禍が轉じて福となつて

世に用ひられ今また著述の小説で禍を買つたれば其禍が又轉じて福と成るハ自然の數なり貴君が好で小説を著ハしたからハ其好を繼續して益々筆鋒の鋭利なるを顯ハし玉へ方向ハ既に定まつたれば時機の來るまでハ變ぜざるふ若くハ無し、僕も永らく著述を業として居るが否といへば否だか面白いと云へば又面白い子夫に貴君ハ經濟法律等の專門學科か有る人だし其學び得たる所を十分に應用して見玉へ著述の功も莫大であらうよ實ハ僕も少々時事に感ずる所あつて或ハ近日世に出やうかとも思へバ君と恰も地位を交換する樣に成るかも知れぬソウ成れ。で文壇の黒頭將軍ハ君なりダ併し清水君それに付てハ貴君篤と考案を費し工夫を練て眞面な著書を一部し玉へ科目ハ何でも君が得意の所に就くが宜しい其譯ハ君が今日世に知られたるは君の才辯と君の才筆だけで未だ君の識見の高きと君の學問の博きを示した所がないから世間の俗眼者流が俄に君に許すに大學士の地位を以てせざるも無理ならぬ譯サ此時に當つては著述を以て十分の學問識見を證するが甚だ緊要ぢや。御尤の御忠告僕も左樣いたさうかと存じたが餘り老成人を學ぶ樣で如何と内々差扣へて居ました。決して差扣る時で無い必らず著述をして世に示し玉へ。左樣ならゞ御覽に備へませうが歸朝の後に間暇さへあれば筆を執て先づ是迄は書ました

が先生御一覽下されて相成らう事なら御校閲をお加へ下されますまいかと手箱の内より一冊の草稿を出して示したり。夢野ハ右の草稿を繰り廣げ讀でハ感じ感じてハ讀み凡そ半時間ばかりも掛りたるが一編の切れ目に至つて漸く其書を置き、コリヤ實に敬服すべき卓見ぢや是を直に出版し玉へ……ナニ〳〵校閲ハ無用序文ハ尤も無用箇程の著述にハ他人の保證を要するに及バず名譽も批判も都て一身に引受るべし。ソンナラ是を今一應校正して出版いたしませうか。ソウとも〳〵。時に先生話が變りますが乙女ハ女優になつたに付き案の如く世間で